恋せよヒーロー！

木村薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋せよヒーロー！

【Ｎコード】
Ｎ５８１６Ｐ

【作者名】
木村薫

【あらすじ】
ご当地ヒーローに騙された！　爽やかな笑顔の青年とアヤシイ眼鏡の青年に挟まれて，地域活性化のご当地ヒーローを強制されてしまう平凡な保育士　遊佐綾香。　怒涛のヒーローライフを送りながらも，ふたりの青年に次第に心が惹かれていく。近づくデビューに，忍び寄る不穏な影に，立ち向かえ！　恋するヒーロー達！　ありえない公務員達の奇天烈な恋愛ストーリー。

第1話　新メンバー勧誘！

「遊佐（ゆさ）ってさ，藤桃市にない苗字だよね」
「実家，遠いんですよぉ」

おい眼鏡，人のプライベートに侵入する気か。
手の中の日本酒を一口煽ってから，微笑んでやる。喉元を熱いほどの辛味が通り抜けてから，僅かに木の香りが残る。うん，お酒は美味しい。
ほんの少し，合コンに来たのを後悔しかけたけど適当にこいつらをあしらい，しっかり食べて元をとってやる。
目の前の三人組に笑顔を向けて，メニューを手に取る。

「私，おなか空いてて。小池先生もなんか頼みます？」
「ここでそんなに食い気だすかなぁ」

さすが小池先生。この場で最年長だけある合コン慣れのコメント。それでも視線は開けたメニューの字を追っていた。

「ごめんなさいね。日中小さい子と外にいるから」
「気にしないでよ。デスクワークの俺たちとは，体の使い方がちがうよね。保母さんって，大変な仕事だなぁ」
「違うだろ。今は保育士さんやん。成瀬，お前が合コン決めたんだろ」
「ゴメン。仕事の後で疲れてるかな。しっかり食べちゃっていいからさ」
「食べた皿，おれの前に置いちゃっていいからさ。恥ずかしくないっしょ」

にこやかに会話をするのは，さっきから私の右側の二人だけだ。
目の前に座る，私の苗字に食いついた眼鏡くんだけは，黙ってチビチビとハイボールを舐めている。

「おい，山田もなんか喋れよ。もう……ゴメンね，遊佐さん」
「いえ，まぁ」

さっきの苗字の食いつきの事だろう。
真ん中に座る成瀬さんは，にこやかにフォローをした。
青いカラーシャツも爽やかに着こなしてる。グラスを持つ時にチラリと見えた腕時計も，ネクタイピンも，シンプルで落ち着いている。男性のブランドはよく判らないけど，そう評価できる。
やっぱり，広報課で仕事しているからだろうか。人前に出る機会が多い人は，ファッションに敏感になる言うし。
相方のようにツッコミを入れている須藤さんは，ふっくらとした体がハチミツ好きな黄色いクマさんを連想させる。総務課に勤務って言ったかな。うん。この人なら無理を言われても「しょうがないか」で万事回りそうだ。
が，目の前の眼鏡の山田さんだけは，異質だ。
さっきの自己紹介では，情報課とか。役所関係のネットワークとかの管理とかの，いわゆる技術屋さん。そんな課があることも知らなかった。
大体，私達若い保育士は，地方公務員といっても役場と縁がない。
毎日接するのは，保育園に来る子ども達と保護者。たまに出入りする業者さんや役場の人は，主任がさばく。
けど私達は知っている。役場や消防署の若い男性が，保育士に合コンを希望している事を！
やっぱり，良妻賢母になりそうなイメージがあるんだろう。
もちろん保育士側もその辺りは把握していて，先輩達から受け継がれた合コンの縁を有効に活用している。

今年二十八の小池先生は，熱心にその縁を使っている。今日も，人数が足りないと言って電話で徴集された私だ。それにしては，男性三人に対して女性は二人。なんだか妙だ。その事を小池先生は気にしていない。もちろん，成瀬さん側も。

やっぱり，変だ。

「で，酔いが回る前に決定しようか。須藤は実際に本人目にしてどう？　やれそうかな」

「いいんじゃない？　声もいいし，体型も理想だけど唐突だな」

「時間ないんだよ。それで，どう？　書けそう？　」

「まかせろ」

「じゃあ，決まりって事かな」

物騒な会話が始まる。

そして何かが決った様子で。

何故か身の危険を感じる。本能が警告を発している。

突然，山田がグラスを押しのけ雰囲気が一変する。

弛みきった飲み屋の酒気が消え去り，思わず横の小池先生を見るとペコリと頭を下げていた。

「ゴメン，遊佐先生！　」

「は？　」

私，きっと間抜けな顔していただろう。

山田以外の三人が，いきなり頭を下げた。

「藤里町の為に，その，犠牲になってくれない？　」

何の事ですか。

「藤里南児童館勤務で，高校時代に新体操団体戦で県代表」

心臓が縮んだ。体中の血が氷点下まで下がった。

山田が諳んじる私の過去。なんで，そんな事知っているのか。

眼鏡の奥の視線がさらに冷たくなって，小池先生を射抜く。

「小池さん。ありがとう。これ，例のメルアド。来週中には，コンパ組むから」

「ごめん！　その，そういう訳で……ごめんね，遊佐先生。このお詫びは必ずするから」

お詫びはするといいながら，差し出されたメモ用紙を握った小池先生は立ち上がっている。山田の視線に耐えれないのか，私が反論するのを恐れるからか，慌ただしく財布から抜き出した数枚の紙幣を置いて小走りで店を出て行った。

金曜の居酒屋の喧騒が，急に遠く感じる。よそよそしく聞こえる。

目の前の男三人組は，市役所の三人と聞いていた。ただの，合コンだった。全てが嘘だったのなら，この人達は私になんの用事だろう。

脅迫，誘拐，ワイセツ罪。いかがわしい事柄が脳裏を駆け巡る。

「山田，唐突すぎ。遊佐さん，警戒してるじゃん。大丈夫だよ。詐欺とか犯罪まがいの事じゃないからさ」

「詐欺とやること変わんないだろ。善い人ぶるのは，もっとタチが悪い」

「そりゃそうだわ」

「須藤まで……まぁ，そうだけどさ」

「あ，ああ，あの！　」

さっきの名刺をバッグから取り出して，テーブルに並べた。

夢なら早く覚めてしまえ。

「これ，偽物なんですかっ」

「いや。これは本物。疑うなら電話してみていいよ。ちゃんと役場に繋がる。不安なら問い合わせてみても構わない」

「……」

山田がさらりと受け流す。その変らぬ無遠慮な態度のデカさに，信じていいような感覚が湧き上がる。

何でこいつの言葉に安心するんだ。心の端の私の理性が突っ込みを入れるのを聴きながら，改めて三人を見つめた。

態度悪い眼鏡と，黄色いクマさんと，爽やか青年。この三人の共通項って，何よ。

「桃花町と藤里町って，三月末に合併した訳なんだけど」

「知ってます」

詐欺とどう関係あるのよ。

一応，公務員。突然の脈略ないトコからの話に戸惑いながら，成瀬さんの言葉に浮きかけたお尻を椅子に戻す。

桃花町と藤里町。私鉄の線路を挟んで東西にあった二つの町。河の向こうは政令指定都市があるベットタウンだ。ただ，若干に私大や高速道路のインターがある桃花町の方が企業が多い故に経済状態はいい。昨今の合併ブームで，大きな財源がない藤里町が泣きついて合併したのだ。

まぁ，どこにでもある話。出身が隣県の私には，関係ない話だ。合併しても給料は変らなかった訳だし。

「町民戦隊モモハナジャー」

居酒屋の安テーブルの上に一枚のカラープリントされた紙が置かれた。
グラスの汗の水滴で，ジワリと滲む桃色の全身タイツにフルマスクのご当地ヒーロー。
昨今流行の，素人が地元ＰＲで作った戦隊ヒーロー。日本で育った人なら，判るであろう。悪を倒し正義を貫く主人公が，何故か全身ぴっちりタイツに変身する特撮作品の模倣だ。

「遊佐さん，保育士だから知ってるかな」
「知ってるもなにも。昨年度まで勤めてた保育園児のヒーローですよ」

一番桃花町との合併を喜んだのは，子どもだったと思う。
モモハナジャーは，近隣の市町村で有名だ。本格的な衣装と脚本と殺陣で，大人の目も耐えれる程の本格ローカルヒーロー。そのモモハナジャーの町と同じになれるのだから，子ども達は「ウチの保育園にも来てくれるかな！ 」と大騒ぎだった。
特に戦隊ものが好きな男の子の興奮は，収拾困難なほどだった。

「合併したからモモハナジャーは無くなったんだ」
「あぁ……そうなんですか」

年少クラスのまさしクン，泣くだろうな。
遊戯室の小さな舞台で日々見えない敵と戦っていた小さな勇姿を，ふと思い出した。

「で，先日に市長から直々に命令があって」
「はぁ」
「藤里町の公務員から一人，メンバーを集めて欲しいって」
「で，新しく次のシリーズ考えろって」

「合併戦隊フジモモジャー」
「はぁ」

安易なネーミングだなぁ。
そう思いながら，滲んだモモハナジャーを見つめる。
鋭さを出す赤色のラインをサイドに入れたモモ色の全身タイツと，白色の全身タイツ。中肉中背。まぁ，フルマスクで顔をわからないけど，体つきやキメポーズの切れのよさからして，若い男性なのは間違いない。よくやるよ。
そう，感想が浮かんだ途端だった。
一つの考えが稲妻のように私を貫く。
まさか。いや，まさかそんなハズない！
それは，きっと瞬きほどの時間だと思う。
その間に脳内を駆け巡った恐ろしい考えを押し込めつつ，紙から三人組へと視線を移す。
山田の眼鏡が，まっすぐに私を見つめていた。

「これ，俺と山田な訳」
「オレは脚本な」

こんな時でも明るい須藤さんの声が腹立だしい。

「遊佐さん。藤里町側からの新しいメンバーで，入ってくれる？」

居酒屋の喧騒が，さらに遠のいた。全身の血が地球の核にまで落ちていく。

「給料前の今日の飲み代，こっちが持つからさ」

非情なヒーロー達が，微笑んだ。

第1話　新メンバー勧誘！（後書き）

次回　１２月３０日　水曜日に更新予定です。

念の為に。
作中の藤里町と桃花町のモデルはありますが，架空の話です。
名前が同じでも，まったく関係がありません。
あと，作品を描く為に，ご当地ヒーローのサイトを覗きました。
参考にした団体は幾つかありますが，特定の団体を模したものではありません。
この話は架空の話である事を，ここに強調します。

初挑戦のラブコメ。
見苦しい点もあるかと思いますが，よろしくお願いします。
苦情，問題指摘，感想，受付中です。

第2話　危険人物？

「遊佐センセーってさ，悩みってないでしょ」

勝手な事を言う。まぁ，小学生ってのはこういうもんだ。ここは大人の度量の広さを見せてあげよう。

「色白いし，痩せてるし，目大きくて可愛いし」

いいぞ。もっと言ってちょうだいっ。

「大人だから学校行かなくていいし。外で遊んでればお仕事だし。あたしも保育士になろうかなぁ」

「最後，何か違くない？」

夕方の肌寒い風が，昼間の紫外線で火照った肌を撫でていく。横で膝を抱えて座った結花ちゃんが，目の前で男の子達がドッチボールに燃えているのを冷めた目で見ている。

小五でこんな目をするかな。

心の中で警告音が鳴り出す。子どもがこんな目をするのは，善い兆候ではない。まだ，児童館で小学生と接する経験は少ないけど，なんとなく気になる。

花壇のブロックに座りなおすフリをして，少し膝を寄せる。体温を感じられるように。心を寄り添えるように。

「学校，大変だよね」

「うん」

「5月だもん。グループとか出来ちゃったり，した？」

「まぁねぇ」

「みんな，結構計算高いんだよねぇ。勉強のレベルとかさ，ルックスとかさ，家の感じとかさ，そういうの見てるよねぇ」
「……」

途端，黙って俯く。
やっぱりなぁ。新学期始まって一息ついたこの時期，女の子はグループが決まってきて大変だ。どこのグループに所属するか，大きなストレスだろう。子どもには，家庭と学校ぐらいしか世界がないのだから。
でもね。

「いいんだよ。自分を良いように見せなくてもさ，妥協しなくてもさ。学校生活，変化があるから。何かのキッカケで結花ちゃんが自分を出せる時ある。その時期がきたら，結花ちゃんにあう友達がみつかる。今は，みんな無理して相手に合わせてるトコあるもん」
「ほんと？　」
「うん……いや，多分。うん，もうすぐ野外活動のキャンプあるでしょ。本性見えてくるって」
「本性って，なんか違う」
「えーっと……じゃぁ，猫の皮がはがれる？　」
「化けの皮がはがれる，でしょ」

小五に修正された。
そのショックに，五ミリほど落ち込む。あぁ，まだ小学生相手って，難しい。短大で習ったのは，就園児対象だ。
こういう時，今は中で事務仕事してる柴田先生なら上手くアドバイス出来るだろうなぁ。二人の男子高校生をもつベテラン先生だもん。
柴田先生の見た目も中身も太っ腹な容貌を思い出して，溜息をつく。短大出て就職出来ても，私は小娘のままだ。

だから，小池先生に利用されちゃうんだ。多分，年明けから言っていた消防署勤務の彼との接点の為に，私を利用したんだろう。先週の合コンを思い出してしまう。
あぁ，いい先輩だと思ってたのになぁ。世間ってのは厳しい所だ。

「やだ。センセーが落ち込まないでよ」
「落ち込ませて。もう少し，いじけさせてよぅ」
「あれ，センセーの知り合い？　知らない男の人が手ぇ振ってる」
結花ちゃんの言葉に，跳ねるように立ち上がる。最近は治安が悪いので，児童館の敷地内といえども警戒は解けない。
どこだっ，変質者！

「ほら，駐車場のフェンスのとこ」
「げっ」

口から蛙が潰れた音が出て，足が回れ右をしていた。
反射的に。危険を回避する動物的本能。

「センセーの彼氏？　」

彼氏なら，回れ右するわけないだろう。
結花ちゃんの言葉にツッコミながら，確認の為に恐る恐る振り返る。
白のYシャツに青のネクタイ。寝癖なのか，先日と違い右側頭部分に大きなハネ。いまどき珍しい，黒ぶち眼鏡クン。
山田だ。

「うわぁ……センセー，やばいって。センセーの美的センス疑っちゃうよ」

「だから彼氏じゃない」
「えぇー！　遊佐センセーの彼氏ぃ？　」
「黙れガキンチョっ」
「彼氏だ彼氏だぁ」
「ただの市役所の人っ。仕事で来た人に変なこと言わないのっ」

だから小学生は嫌なんだ。
結花ちゃんの言葉を耳ざとく聞きつけた男子達が騒ぎ出す。駆け寄ってきた男の子の持っていたボールを奪い，渾身の力で藤棚の上めがけて投げてやる。
ボールは美しい放物線を描いて藤棚の上に乗っかった。その下で巣を失ったアリのようにうろたえる男の子達。ブーイングの嵐を尻目に，事務所の中の柴田先生に一声かけてからフェンスに駆け寄る。

「いいの？　あれ，あのボール」
「ボールが取れるまではこっちに来ませんから。で，わざわざ職場に来るなんて非常識」
「だって，メルアドもケータイの番号も教えてくれなかったから」

山田はしれっと答える。
私のせいか？　でも，あの状況で，ケータイ番号も何も，教えられるハズがない。
先週の悲劇は，夢だと思いたかった。そんな思い，山田には想像もできないに違いない。
給料日前の合コンに誘われて出てみたら，ローカルヒーローになりませんか……だなんて。アホらしいにも程がある。
私は俳優志望でもない。コスプレ趣味もない。特撮オタクじゃない。普通の保育士。適材適所ってもんがある。そう，抵抗して断わったんだけどな。
山田は手にした青く分厚いファイルから，一枚の紙を取り出した。

『フジモモジャー　第一回打ち合わせについて』と打たれている。
「次回の打ち合わせ，金曜の七時半。駅裏の『ウサギ屋』。他のメンバーにも紹介するから」
「だから，私はやらないって」
「遊佐さんしか，やれる人いないんだよ」
「なんで断定するのよ」
「理想だから」

唐突の言葉に，思わず山田の顔を見つめてしまった。
黒ぶち眼鏡の奥の目は，まっすぐに私を見つめていた。こんな風に，人を射抜くように見つめられる人，いるんだ。こんな風に見つめられた事，あったかな。
意外なほど涼やかで綺麗な目尻のラインに見蕩れてしまった。
「新体操やってたから，バク転出来るよね。ほっそりとした体型で手足が長いからコスチュームが綺麗に着こなせるはずだし」
コスチューム……？
「保育士さんだから人前に出ていく事も演じる事も，素人より上手いし……」
「は？　え，演じる，演じるって」
「フジモモジャー」

私が馬鹿だった。間抜けだった。阿呆だった！
山田の頭ん中はフジモモジャーで一杯なのにっ。色っぽい事なんて，地球最後の日までありえなさそうなのにっ。
私は何を考えていたのよ。
あんまり瞳が綺麗だったから。意外にも，力強い視線だったから。

だから，惑わされた。
千円の激安Ｔシャツに保育士支給の赤いジャージズボン。ピンクと白のチェックの薄いエプロン。頭からスニーカーの先まで砂埃で薄汚れている私の姿も見てないに違いない！
体型とか，手足とか，綺麗に着こなせるとか。そんな事言うから，私，変な事考えてたじゃないの！

「あ，もう戻らないと。ついでで寄っただけだから。じゃあ，そういう事で」

山田は首から提げたＩＣプレートを光らせて身を翻す。駐車場に止められた『防犯は，あなたのその目を光らせて』とステッカーが貼られた白バンに素早く乗り込んでしまった。
怒りに震えた私に爽やかに手を振り，くたびれたエンジン音を響かせて去っていく。
呪ってやる！　人の気持ちも知らないで！　私の意見も聞かないで物事進めたな！
背後で歓声が起こる。藤棚を竹箒で突付いてボールを落としたようだ。
子ども達の無邪気な声を聞きながら，決意を新たにする。
山田なんか，大ッ嫌いだ！

第2話　危険人物？（後書き）

次回は年明けの　1月5日　水曜日に更新予定です。

今年も一年，色々と読んでいただきありがとうございました！

来年こそは，来年こそは『見下ろす～』を書き進めますっ。納得出来るトコまで書き進めますっ。

良いお年をお過ごしくださいね。ではでは。

第3話　返り討ち？

ガラス張りの役場前で，思わず立ち止まる。私の格好，変じゃないだろうか。

紺色の小さなリボンが見えるよう，淡い空色のカーディガン。ふんわりとした綿のスカート。ローヒールのサンダルだけはしかたない。普段スニーカーだから，高いのは履けない。もう少し高いほうが，足が綺麗に見えると思うんだけど……。

いや，ちょっと待て私。別に綺麗に見えなくてもいいじゃない。私は，モモフジジャーの件を断固として拒否するために来たんだから。『歯医者へ行くため』と嘘ついて有給つかったんだから。

バッグを持ち直し，五時回った役場の正面玄関から突入。

ガラス張りの新しい庁舎。築四十年は経っている藤里町とは雲泥の差。豪奢で広い庁舎に驚きながら，素早く壁面の地図で確認して広報課を目指す。

そう。今回はきちんと作戦を立てた。恐らく特撮マニアな山田に話は通じない。今までの経験で，イタイ程判った。ならば，常識人らしき成瀬さんに頼み込むしかない。いや，泣きついてでも拒否しなくては，私のアイデンティティーが崩れる。

「あの……成瀬さん，いらっしゃいますか？」

天井から吊るされた『広報課』の札を確認してからカウンターの中に声をかける。五時を回っているのに，忙しなく働く活気溢れる職場だ。まだちらほら訪れる市民に対応している住民票の受付よりは静かだが。

ＰＣとにらみ合っていた若い女性が，その勢いのまま視線を投げかけてくる。

「成瀬は只今，外出中ですが」
「え？　あ，しまった」
名刺をもらったんだから，電話でもしておけばよかった。
「ご用件は何でしょう？　よろしければ承っておきますが」
「えっと，あぁ……いえ」
まさか『フジモモジャー』とは言えない。自分からあんなのに関わっていると思われたくない。が，そうこう迷うウチに，女性の視線はキツクなる。同じ女として，このキツさは恋人に横恋慕する女に向けるほどの強さだ。まさか，誤解してるんじゃないでしょうね。
嫌な予感が背筋かた這い上がる。成瀬さん，爽やかで好青年だったから……充分に予感が的中している気がする。同じ課ならば，若い女の子は気になるのが自然だもの。
「何のご用件でしょう」
剣のある声でそう追い詰められた。
ごめんなさいっ。思わずそう頭を下げようと肩をすくめた途端だった。
朗らかなテナーの声が私の名前を読んだ。
「どうしたの？　こんなトコまできて」
「き，金曜日の件で，ちょっと……突然すみませんっ」
振り返ると，外から帰ってきたのだろう。一眼レフのカメラを肩から提げた成瀬さんがいた。相変わらず，笑顔が爽やかだ。同じ白のYシャツを着てるのに，山田よりハイセンスな気がするのは何故だろう。

「じゃあ，向こうで話そうか。浜島さん，カメラに福祉協議会の写真あるから」
「わたしが？！　」
「社会福祉協議会は浜島さんの担当。一眼レフ使えないって言うから，代わりに行っただけ。後の処理はやってくれなきゃ」
素早くメモリーカードを取り出して，写真をダウンロードする手順を説明しだす。その嵐のような解説の合間にも，私は息を潜めていた。
視線が痛い。浜島さんと呼ばれた女性から，気迫のようなものが迫っているのを感じる。そう，霊能者なら，燃え上がる炎の気が私を縛り上げるのを見えたかもしれない。これは，明らかに嫉妬の炎だ。恐る恐る彼女を見ると，確かに目尻上がり目の瞳が睨んでいる。
ちゃんと説明聞いてなさいよぉ！
「じゃ，何か困ったら近藤君に聞くなりして。自販機コーナーにいるから」
一方通行の解説を終え，歩き出してしまう。う，動けない。視線が痛くて動けません。ついて行っていいんですか？　広報課以外にも，明らかに女性の視線を感じるんですが……。
固まった私に気付き，成瀬さんは振り返る。
邪気のない笑顔で手を振り招く。
私，敵をつくりに来た訳じゃないのに。
喫煙所も兼ねているのだろう。駐車場へのロープ横の自販機コー

ナーの横，吸殻が山のように積もった灰皿からのニオイでニコチン臭い。でも，そのお陰だろう。足早に駐車場へと通り過ぎる人や，役場への正面玄関を目指して傍を歩いていく人はいても，誰も寄り付かない。会話を聞かれる事はない。適度な人目と，密室感。

小銭を財布から取り出しながら，唐突に成瀬さんは切り出した。

「巧……山田，いきなり職場に行ったんだろ？　そりゃヒクよね」

「はは，は」

鋭い読みに，乾いた笑いしか出てこない。やっぱり，この人は常識をもっている。安心感で胸いっぱいだ。

「とにかく，今回の話には驚きっぱなしで……その，私より適任者がいると思うんですよ。なにも，本当に藤里町の職員じゃなくても，藤里町の特撮マニアの人とかでいいと思うし。だから」

「何にする？」

笑顔で自販機を指差され，反射的に無糖紅茶を指差す。そのままポチリとボタンは押され，無機質な衝撃音。お金を出していない事に気付いて慌ててバッグに手を入れると，冷たい缶が頬に当てられる。

「わざわざ有給とって来てくれたお礼。顔見て断わろうって思ってくれたのは，結構うれしい」

「じゃあ，遠慮なく」

ここで遠慮するのも変だ。ここまで褒められたんだから，素直におごられよう。

成瀬さんがアイスココアを選んだのに驚きながら，缶を開けて一口飲む。心地よい冷たさと香りに，一息。自分が緊張していたこと

に気付いた。

「でもさ，だから遊佐さんに決めたんだろな」

甘そうなココアを喉を鳴らすように飲んで，成瀬さんは幸せそうに微笑んだ。

「彼女以外に，いないって。めったに人を褒めないのにさ。巧なりにさ，遊佐ちゃんを引っ張り込もうって必死なんだろうな。もう，見ていて判るよ。淡白で人に無関心なのに，遊佐ちゃんに関すると人が変るんだよ」

再び，缶を傾ける。その飲みっぷりにも驚きながら，山田の行動に言葉を失った。

つまり，最初から『好意』だったと。私は『悪意』にしかとらなかった。

「受け取り方の違いですね。私，最初から怖かった」

「だよなぁ。俺だったら，そんな事しないな」

突然，顔を覗きこまれた。

「去年の合併前の親善運動会。そん時に遊佐さん見つけたらしくて。出てたでしょ？　多分，俺達と同じ頭数揃えるのでさ」

「はぁ」

勢いが怖い。近づく爽やかな顔が怖い。

思わず，半歩だけ後ずさり。

「企画は実行不可能だって報告するつもりだったのに，山田の奴

その企画を復活させるし。なんかソワソワするし。でも，こないだの飲み会で実際に会ってみたら納得した」
「納得？　」
「今時珍しいぐらいのお人よし。優しくて，強くて，それでいて可愛い。大きい目してて」
「あ，ああ，あの，お人よしですか？　」

どもる自分の声が，凄く慌ててる。何か，空気が違うトコへ行きかけてる。
修正しなきゃ。流れを変えなきゃ。話題を変えなきゃ。

「な，成瀬さんもいい人じゃないですかっ。さっきも困った同僚の人を助けてたんでしょっ」
「俺をいい人って言ってくれるんだ。嬉しいな」
「そ，そういう事じゃなくってですねっ　」

墓穴を掘ってしまった！
頭の中が真っ白に塗りつぶされる。心臓のドクドク音が体中に響き渡る。指先まで，脈打ってる。
笑みを含んだ鳶色の瞳が近づく。ふんわりと，ココアの香りに包まれる。
気づいたら，左頬に柔らかい唇を押し当てられていた。

「俺が先に予約，しとく」

固まったまま，成瀬さんの顔が離れるのを眺めていた。
卑怯だ。こんな綺麗な鳶色の瞳で見詰めるなんて，ずるい。

「可愛いなぁ。良いニオイする。も一回」
「だ，ダメですっ。何，何してるんですかっ」

「なんだ。正気に戻っちゃった」

金縛りから解けた蛙の逆襲の如く，私が腕を振り回して距離を作る。

そんな必死な抵抗すら微笑まれ，挙句に身長差を利用して頭を撫でられる。

「まぁ，いいや。じゃあ，『ウサギ屋』でね」

「行きませんっ。絶対に行きませんっ」

「駄目。絶対に来て。俺，予約したんだから」

「私は誰にも予約されませんっ」

「ははは。またね」

「……さよならっ」

間違えた。

成瀬さんも変人だった。

人選を間違えた。計画が不完全だったんだ。見誤った。大誤算だった。壊滅，殲滅，敗北だ。

思いっきりバックを振りながら，自販機コーナーから早歩きで撤収する私の後姿へ，成瀬さんの楽しげな笑い声が見送ってくれる。

おかしい。どこで，どう間違ってしまったんだろう。

この変人の集いから，一刻も早く抜け出さなくては。

そう思うのに。そう思ってるのに。

私の両手は，いつの間にか左頬に当てられていた。

柔らかい感触。唇の温かさ。

まるで確かめるように，逃がさないように，両手で左頬を押さえてる私がいた。

第3話　返り討ち？（後書き）

明けましておめでとうございます！
今年もとりあえず，更新予告日だけは守っていきたいと思います。
蝸牛の歩みですが，お付き合い頂ければ嬉しいです（汗）。

次回　１２日水曜日　更新予定です。

第４話　作戦会議？

金曜日。夜の七時二十七分。
来てしまった。永遠に来なくてよかった時間が，来てしまった。
時間って残酷だ。誰もに平等に与えられる時間。流れていく時間。
避けられないし，巻き戻せない。
無視してもよかった。逃げてもよかった。でも，そう考えるたびに左頬が温かくなる。
断りを入れにいったハズで，成瀬さんにキスされた左頬。そこに血が集まって，考えがリバース状態。

「しょうがない，のよね。しょうがないのよ」

だって，勝手に約束破る訳いかないよ。そんな後ろめたい事，したくない。でも，なぁ。
グルグル，自問の思考が無限のループ状態。自転車のサドルを握り締める仕事帰り。砂だらけのスニーカーにジーパンに，Ｔシャツにパーカーの私に色気はない。
そう，きっと二日前の悲劇は避けられるはずだ。この格好で，何度高校生に間違えられた事か。
大丈夫。大丈夫。
そう言い聞かせ，駅裏のウサギ屋の前で自転車を止める。
カントリー風でまとめた外装の目立たぬ隅に，自転車が大量に駐輪してある。
昨今は飲酒運転には厳しいから，公務員グループは自転車で来たんだろう。
と，いう事は皆来てる。
思わず，足が竦む。
この自転車の数だけが『フジモモジャー』関連の人の物ではない

のだろうけど，この計画にどれだけの人が関わっているのだろう。
馬鹿げた戦隊模倣。でも，これに地域活性を賭けているのなら，安易な気持ちで受けられない。いや，今から断る事は出来るんだろうか。
私，トンデモナイ事に巻き込まれかけている。恐怖と言えるほどの危機感に襲われる。

「か，帰ろう……」

思わず，ハンドルを切って回れ右した途端だった。
激しく何かを叩きつける音。ガラスが割れる音。
思わず振り返ると，騒々しく鈴の音を鳴らしてお店のドアが弾かれるように開いた。

「い，い，いらっしゃい！」

ドモリながら，山田が飛び出してくる。
お魚咥えたドラ猫を追いかける主婦のような形相に，思わず私の足は凍りつく。

「いらっしゃい！」
「ど，どーも……」

大股で迫ってくる山田の気迫に，すっかり飲まれた私は頷くしかない。
どーも，じゃない！　肯定したらマズイのに，私は固まったまま動けない。

「みんな，待ってる」
「え，あ，違う。今日は断ろ……」

「今日は来てくれてありがとう」

反則だ。

「今日，来ないかと思ったから。ありがとう」

山田の目が，まっすぐに私を見つめた。

黒縁眼鏡の向こうから，ブレルことなく，私の迷う心のど真ん中を突き刺した。

ありがとう，だなんて。そんな言葉を突き刺されたら，逃げ出せないよ。

反則だよ。そんな瞳は。その言葉は。

「入って。皆，もう待ってるから」

「……うん」

私の手から優しく自転車のハンドルを離す大きな手。

ほんの少し触れた手は，驚くほど冷たかった。

「遊佐ちゃーん。入って入って」

「あ，成瀬さん」

「早くしないと，みんなデキあがっちゃうよ。酔ったら打ち合わせになんない」

朗らかな声に戸惑っていると，マッハ級の速さで私の自転車を止めて戻ってきた山田が私の手を素早く掴んで歩き出す。

冷たい手に手首を捕まれたまま，ぼんやりと引きづられる私。

これは，好意？　それとも，フジモモジャーのプロジェクトを成功させる為の義務感？

訳が判らないまま，引っ張られる。

「ほら，皆に紹介するよ」

最後の決め技。成瀬さんまで，片方の手を握り強く引っ張り店内へ招き入れた。

その瞬間，眩しい店内に静寂の間。

何故か濡れた床。キラキラと飛び散っているガラスの欠片。モップを持って立ち尽くす数人の男性。すでにグラスを傾けている男性達。

「紹介しまぁす！　フジエンジェルの遊佐綾香ちゃんでぇす！」

「え，えぇぇぇえ？！」

その名前は何？！　っていうか，決定なの？！

衝撃と恐怖で固まった私の耳に，意味不明のどよめきが響く。

貧血なのか，それとも現実から逃れたい為の気絶寸前状態なのか。

私の薄くなる意識の向こうで，勝ち時のような咆哮を上げる男性グループ。

人生には誤まってはいけない瞬間がある。映画だったかドラマだったか，定かでない台詞が思い出される。

私，その瞬間を見逃してしまったのは，間違いないらしい。

会議は踊る。

映画のタイトルだったか。そう記憶を遠くに飛ばしながら，綺麗に磨かれた薩摩切子に注がれた日本酒を口に運ぶ。

きりりと，辛くも薫り高い液体が細胞に染み渡り喉を心地よく焼いていく。思わず吐き出す息には，仄かな香り。これは，これは美

味しい！
思わず頬が緩むと，素早く隣から新たに酒を注がれる。
「いやぁ。お嬢さん，美味しそうに飲んでくれるねぇ」
「だろ？　マスター，取っておきの酒を頼むよ」
「あいよっ」
「ちょっと！　今日は飲み会なわけ？　」
「まさか」
「飲み会とかこつけての，企画会議だよ」
「企画会議にかこつけた飲み会，じゃないの」
思わずそう返すと，隣の席の山田は声を出して大笑いした。
眼鏡の奥の目が，楽しそうに細まる。なんだ。こういう風に笑えるんじゃん。
少し嬉しくて，また頬が緩む。
「とにかく。メンバーとか製作の流れを紹介するよ」
カウンターから，新たに刺身の盛り合わせと豚の角煮を持ってきた成瀬さんが，笑い倒れる寸前の山田の言葉を引き継いだ。
「基本的に，脚本はこういう飲み会兼ねた企画会議で，皆で話し合って流れを決めてく。大体は，こういう酒飲みの馬鹿話。で，脚本の形にするのが須藤」
「演出もしてるんだ」
そう言って笑う須藤さんは，ハチミツならぬビールを飲んだクマさんだ。赤ら顔に大ジョッキが似合いすぎる。
「で，脚本に沿って音入れ。これは，当日都合がいいメンバーで

やる。一人で何役もやるから大丈夫。けど，遊佐ちゃんは必ず出席ね。女性は遊佐ちゃんしかいないから。さすがに男が裏声で女声だすのは無理あるし。」

「音入れ？　」

慣れない言葉に首を傾げると，ようやく笑いが収まった山田が説明を引き継いだ。

「脚本に沿って，台詞を録音すること。本当は演じながら台詞を言うのがいいんだろうけど，全員がそろうように練習する時間が取れないから。これなら，当日は動きだけに集中できるから効率がいい」

つまりは，当日は口パク。台詞にそって，動きをあわせればいいのだから，多少の練習不足でも何とかなるという訳か。

皆，本職は公務員。仕事終わってから練習となると，大変だ。

「じゃ，練習は残業扱いなんだよね」

「まさか。これ，趣味の扱いだよ」

苦笑いの須藤さんに，笑顔が凍りつく。

市長命令じゃなかったか？　それじゃあ，この飲み会はヲタクの集いじゃないのっ。

私，未知の領域に足を踏み入れてしまったらしい。

「でも，趣味だからって馬鹿にしちゃ駄目ですよぉ」

すでに酔いが回っているのか，それとも本来の喋り方なのか，のんびりな言葉が隣のテーブルからかけられる。

「僕ら，これに将来賭けてますからね。あ，僕は桃花芸術大の造形科の四年生やってる西脇ですぅ」
「……大本っす」

まるで天使のような美少年が舌足らずに西脇くん。その横で体育会系な大柄な青年が大本くん。まるで漫才コンビのような体格差だが，二人は気の合う友人らしい。
西脇くんが「あれどこだっけ」とリュックを開けると，大本くんが素早く何冊ものファイルをテーブルに差し出す。見事な阿吽の呼吸。

「素人のお遊びじゃないですよぉ。地域活性化の起爆剤ですからねぇ。コスチュームは本格的に造ってますよぉ」
「これ，造ってるの？　まさか，君たち二人で？！　」
「怪人のマスクだけは難しいから，これだけ発注なんだけどねぇ。でも，いつか僕らも造ってみたいなぁ」
「……ういっす」
「特撮プロ会社と同じ所に発注してるから，すんげー高かったんだ」

ファイルに整理されたデッサン画。設計図。細かな数字やパーツが並んだ図面。そして，完成写真。
あらゆるポーズを決めるその写真から，本気の誇りが漂っている。

「お，大人が本気で遊ぶとすごいねぇ……」
「ま，そういう事だね。遊佐ちゃん，良いこと言うねぇ。こう見えて，俺達本気なわけ」
「だから遊佐さん，ちょっと立ってくださいねぇ」
「はぁ」

天使の微笑みにつられて，箸を置いて立ち上がる。
大本くんが，何故か真っ赤な顔してポケットから四角いものを取り出した。

「遊佐さん，スタイルいいから腕の奮い甲斐ありますぅ」
「……ういっす」

にこやかな笑顔。綺麗に並んだ白い歯。その前に引き伸ばされたメジャー。

「希望，ありますぅ？　フジエンジェルって名前だし，藤の花と羽をイメージして造ろうかなぁ。女の子ファンの獲得も考えて，可愛いデザインがいいですよねぇ」
「はぁ」
「じゃ，そういう訳で，スリーサイズから測らせてくださぁい」
「へっ，変態ー！」

本能で，天使の容貌で悪魔な西脇くんを叩き倒してしまう。
酒の勢いで，製作する。これは，あまりよくない気がする。
そう思いながらも，常識から離れたくてグラスをあおる自分。
あぁ，さよなら……私の平穏な毎日よ。

第４話　作戦会議？（後書き）

お，遅くなりました！　更新何とか出来ました（汗）
いつもの８時に出来なくてゴメンなさい……。

次回　１９日　水曜日に更新予定です。
よ，予約しときます～っ。

第5話　これはドキドキ？

夜風がひんやり心地よくって歌ちゃうよ。

「遊佐ちゃんって，笑い上戸だったんだね」

「しかも，あれほどの酒豪だったとは思わなかったな。須藤より飲んでたよな」

「なによぉ。いいじゃ～ん。皆で楽しく飲んだんだも～ん。ショーのアイディアだって出来たんだも～ん。無問題（もうまんたい）～いじゃ～ん」

「どこが無問題だよ」

「可愛い酔っ払いだねぇ」

「可愛い酔っ払い違うってっ。私はぁ，酔っ払いなのぉ！」

うけけけけ。

妖怪じみた笑い声を上げる私を，成瀬さんがオンブしてる。

ごめんねぇ。重いよねぇ。

その横を，私の自転車を押して歩く山田。

ありがとうねぇ。

「まぁ，絡んだり泣いたりよりは，いいのか」

「フジエンジェルも承諾してくれたしな」

「正義の味方，フジエンジェルでぇす！」

「はいはい。判ったから」

「ふひゃひゃひゃひゃあ～」

「まぁ，よかったな。ご機嫌だし」

「ご機嫌ですよぉ。だってぇ」

今夜は月も綺麗だし。風も素敵だし。

「大好きな成瀬さんと山田と一緒だしぃ～」
だからご機嫌なんだよぉ。
「今，何気に爆弾発言だよな」
「二人とも大好きか。なんで浩介も入るんだよ」
「俺に言うなよ。あっ，巧ひょっとして妬いてるのか？　」
あれ。
あれれれ。
浩介って誰ですかぁ。巧って誰ですかぁ。
「あぁ。山田　巧。成瀬　浩介。下の名前。判る？　おーい酔っ払い，聞いてるか」
聞いてますよぉ。なぁんだぁ。下の名前かぁ。仲良しなんだねぇ。
「従兄弟だから」
そっかぁ。いいねぇ。
あぁ，いいなぁ。仲良し，いいなぁ。
「子供じゃあるまいし」
「恋敵になったんだけど。遊佐ちゃん，この状況を判ってるのかな」
山田が眼鏡のフレームをいじる。
あ，山田，困ってるでしょ。それ，癖だね。
うふふふ。

何を言う。仲良しは良いことですよ。仲良き事は素晴しき哉ですよぉ。

「遊佐さん？　」

まだ肌寒い風が，火照った頬を撫でていく。

よい夢を。

おやすみなさい。

そう撫でてくれた母親の手の平を思い出していた。冷たくて，ほんのりと温かくて甘い香りのした，お母さんの香りを思い出していた。

「だぁいすきぃ……」

少し前は，ファーが付いたコートやブーツを売っていた店先。たった数週間で軽やかな素材のストールが並べられている。

鮮やかな色彩とリボンとレースで溢れた世界に浸って，私は憂鬱に唸る。

「悪かったわよ。その，必死だったのよ」

「判ってますよ。判ってます。でも小池先生，あの後凄い事になったんですよ！　せめて」

「今日のお昼は奢るわよ」

「そうこなくっちゃ」

それなら，新しいパンプス買えるかな。

思わず浮かんだ笑みを隠さずに靴屋さんに入る。
購買意欲を高める為に，不必要なほどにポップな曲を耳障りにかける店内。
うーん。この店じゃ趣味にあわない。
ふらり，ふらり，ショッピングモールの中を歩き回る。
他愛のない会話。日常から僅かにはみ出した，非日常。大量消費の毒々しい華が咲き誇る大型店舗の中に作られた，人工的な谷間を歩き回る。
ヒラリ，宙に浮かぶ蝶のように。

「それで小池先生は，目当ての彼と上手くいったんですか？」

ゆっくりと歩いて店先を覗く行為を繰り返しながら話題を振ると，歪んだ笑顔を向けられた。
あぁあ，聞かなきゃよかったかも。

「ごめんね遊佐ちゃんの事考えると申し訳ないんだけど」
「もういいです。もう聞きませんっ」
「ごめんごめんってば」
「うん……まぁ，小池先生が幸せならいいですよ」
「遊佐ちゃん大好き！　何でも聞くからさっ」
「……」

裏切られた人に何でもはなしても，それはまた裏切られる気がする。
その言葉を飲み込んで口元で笑う。
裏切りは，もう嫌だ。

「本当だよ。だって……私だってあんな事したの，誰にも言えないじゃない」

店頭に飾られたマネキンのストールを撫でながら零れた言葉に，思わず顔を上げた。
柔らかな布地を触って，苦しそうに眉を寄せて。
「私，確かに彼と付き合えた。でも，でも……失ったものが大きすぎるのに気づいた。ゴメン。本当，ゴメン」

山田。あんた，残酷だよ。
自分の欲望の為に，私達を傷つけたんだよ。
判ってるんだろうか。
あの眼鏡の奥の澄んだ眼は，そんな冷酷さはなかったのに。
優しい表情だったのに。

「判りました。じゃあ，小池先生には重大な事を相談します」
「遊佐ちゃん？」
「小池先生と私は，同志です。あの山田に騙された同志です」
「騙された……？」

苦笑いを浮かべてしまう。
この秘密を，どうすればいいの。

「それ，ネタじゃないよね」
「失礼な」
「だよねぇ……。現実離れしてるから，つい」
「判ります。判りますよ。でも本当なんですっ」

思わずオムライスにスプーンを刺してしまう。お皿に零れていく真っ赤なケチャップは，涙の色。
フジモモジャーの話をしたら，真面目な顔で唸りだす。
そりゃあ，唸るだろう。
飲み会で「戦隊メンバーに入ってくれ」と脅迫される事なんて，普通の人生ではありえないことだ。
強くなってきた日差しを感じながら，窓の向こうを走る車の列を目で追う。
赤や青や白や黒。鮮やかな車が流れていく。
そう。普通はありえない流れに，巻き込まれてしまった。
鮮やかな全身タイツに身を包んでポーズを決めなきゃいけないなんて，どこで，どう間違えたのだろう。

「で，やるの？　」
「嫌です！　絶っ対に嫌です！　」
「だよねぇ。で，どうしたの」
「どうしたのって，何がですか」
「うーん。間違えた。つまり，何をしたいのかって事」

小池先輩はレタスを器用にフォークで刺して，小さな口に運ぶ速度を変えずに問い続ける。

「たしかに大問題なんだけどさ。やらないなら，早く断らないと。プール開きがもう直ぐでしょ」
「プール開き？　」
「去年もやらなかった？　モモハナジャーのショー」
「あぁ……そうなんです。今年もプール開きでショーをするんですけど」
「そこでデビュー？　」
「はい……」

「その感じだと，もう決定？　」

私の目を見る小池先輩の目が笑っている。

「相談する事はないじゃない。もう決めてるんでしょ？　腹は据えたんでしょ？　」

「先輩……」

「遊佐ちゃん，一度決めたらブレないもの。じゃあ，これは相談じゃなくて愚痴だね」

あぁ。そうだ。

もう断れないと，飲み会で判ったのだ。だから，これは相談ではなく，愚痴だ。

思わずスプーンを置いて，両手で顔を覆う。

何を愚痴っているのだろう。内面を暴露しているのだろう。

自分の事を話してしまい，恥ずかしい事この上ない。

「いいよいいよ。話してすっきりする事もあるんだからさ。こんな事，誰にでも話せる事じゃないしね」

ぐりぐりと頭を撫でられて，私は両手で顔を隠したまま頷いた。

そうだ。

苦しかった。吐き出したかった。この不安を，この動悸を。

何でこんなに苦しいのか判らなかったけど，ようやく判った。

私は，戦隊モノをするのが恥ずかしいから不安だった訳ではないんだ。

変態まがいの全身タイツ衣装を着る事が苦痛だった訳ではないんだ。

このドキドキは，この不安は，恋の不安だったんだ。

私は，山田が好きだ。成瀬さんも好きだ。

だから，断れない。
だから，誰にも相談出来なかった。

「先輩……」
「いいよいいよ。とりあえず泣いちゃいなさい」

何気に突き刺さる視線を物ともせず，先輩の言葉に甘えて声を殺して肩を震わして泣いた。
どうしよう。
怖い。
好きになる事が怖い。
知りたい。彼らを知りたい。私を知って欲しい。
でも，それが何よりも怖いのだ。
相手に近づく事が，相手に全てをさらけ出す事が，怖い。
だって，だって，嫌われたら，どうしよう。
近づきたいけど，近づけない。
私自身，私が嫌いなのに。大嫌いなのに。
なのに私を嫌わないでほしいだなんて。
そんな都合よい事を考える自分が，とてつもなく汚く思えて。
全ての感情が溢れてく。
ゴメンね。嫌だ。大好き。大嫌い！

第5話　これはドキドキ？（後書き）

次回　２６日　水曜日の更新予定です。

第6話　ネズミの従者達？

いつの間にか，空には三日月。
夕暮れに追い立てるように，子供達が家路へ急いでいく。
「宿題やんなきゃ」
「やべぇ。用事があるから早く帰れって言われてた」
「塾いかなきゃ」
口々に予定を思い出して，叫んで，走り去る。
ヘルメットを斜めに被って，自転車を漕ぎ出す。
キックボードで疾走していく。
夕方の児童館は，慌しい。
遊びに来て，五時のチャイムと同時に帰って行く子供達。
反面，保護者の迎えがあるまで残る子供達。
両方が入り乱れての大移動。
監督者の私も目が回る。

「遊佐せんせーい！　おやつー」
「食べたでしょ。ここはねぇ，計算間違いしてるの。みなおしてごらん」
「腹減ったよー」
「駄目だよ。今食べたら晩御飯食べれなくなるよ。何？　音読の宿題？　それはお家の人に聞いてもらってね」
「遊佐せんせーい」
「はいはい」

宿題を始めた女の子達の机に寄り添っていた私に，男の子達が飛び込んでくる。
砂埃だらけの服で床を白く汚し，爪の間まで泥だらけの手でTシャツを掴んでくる。

「はーらーへったー！」
「尚吾くん，今日の給食はサバのホイル焼きだったでしょう？」
「すげ！　何でわかんの？！」

だって，左手がサバ臭いもん。
恐らく，箸では上手く身を解せずに手を使ったのだろう。名探偵コナン並の推理力を駆使した私は，左手が魚臭いとは言わずに優しくTシャツにを掴む手を解く。

「ってことは，おかわりしたしょ。おなか一杯食べてきたんでしょ？」
「うん！　休んだ子の分まで食べたよ。最高新記録の三つ！」
「尚吾すげぇよ！　ホイル焼き三つに牛乳二本飲んだんだよ！」

誇らしげに新記録を報告してくる尚吾くん達を前に，私は必死に痙攣する頬を手で隠す。
周りの友人達に記録を称えられて，誇らしげに甘えてくる尚吾君を冷たくあしらえない。
けど，宿題の最中に妨害された女の子集団の気持ちも判る。
まったく……ホイル焼き3つに牛乳二本のおかわりをして，おやつも食べて，何で腹減ったと来るのだろう。
成長期の男の子って恐ろしい。

「とにかく，おやつのおかわりはありません。あなた達，宿題しなきゃ。漢字はそろそろテストじゃないの？」
「明日，小テストあるよー」
「うわっ！　ばらすなよ！」

男の子と女の子の罵りあいが始まる。

男と女ってのは，何か対立する運命なんだろうか。
騒然となる遊戯室で，私は壁に掛けられた時計を見上げる。
五時半。
終業まで，もう一踏ん張りしなきゃ。さて，どうやってケンカを仲裁しようか。
腕を組んで子供達のケンカを何気なく眺めていたら，そこに有り得ない人を確認する。

「げっ……山田じゃん」
「あ！　遊佐せんせいのカレシだぁ！　」
「彼氏じゃない！　」
「彼氏だ彼氏だ」
「違う！　市役所の人なのっ」
「二股？　」
「違うーーっ」

遊戯室が声にならないドヨメキで埋められる。
どうして，こういう事には敏感なんだろう。
色恋に素直な反応をする子供達にため息をついて，窓に近づく。

「いやぁ。仕事してる遊佐ちゃんが見たくてさ」
「何の用よ」
「だって山田は遊佐ちゃんの職場に行ったのに，俺だけ見れないなんて納得出来ないよ。ね，ここ開けて」
「用がある方は職員室へっ」

ネクタイしたいい年の男二人組が，滑り台やブランコの遊具を背景に窓ガラスを叩いている光景。
この二人は仕事してるのだろうか。なんで職員室から来ないんだ。
ガラスを挟んで開けろと身振りで要求する二人に，断固として開

けまいと私も身振りで答える。
「御用の方は職員室っ」
「あらら。何の騒ぎかと思ったら，巧くんに浩介くんじゃないの」
おっとりとした口調に振り返ると，柴田先生が遊戯室へ入ってきた。
丸みある体をピンクのエプロンで包み，穏やかな笑みを浮かべてやってくる。
対照的に，元気だったガラス向こうの男二人は硬直していた。
「市役所は暇なのかしら。珍しいわねぇ」
「お，お久しぶりです……」
「お元気そうで何よりです……」
「まだ児童館は忙しい時間なのよ。どうしたの？　」
「いえ，その，遊佐さんに用件がありまして」
「じゃあ，職員室へまず来てちょうだいな」
いつもの口調で，いつもの仕草で，おっとりと語りかける柴田先生。
だが，山田と成瀬さんは明らかに様子が変だ。
「遊佐先生。ここは私が見とくから遠慮しないで。巧くんも浩介くんも，悪戯しちゃ駄目よ」
２０代の男二人に「悪戯しちゃ駄目よ」って言葉は，どういう意味でしょうか。
そんなツッコミを脳内でして，軽く眩暈がする。
どういう知り合いなんだろう。

「い，いえ……ほら，おばさんも忙しいでしょ？　ほら，業者さん待ってるし」
「誰もこないわよ。もう5時回ってるんだから」
「でも，正面玄関の所に白いバンが停まってますよ？　」

山田と成瀬さんのダブルプレーに，柴田先生と私は慌ててテラスに出る。
そして，好奇心の塊である子供達も，ジリジリと足元から隙間を使って偵察にやってくる。

「あら，誰かしらねぇ。そういえば，ガスの点検は？　ほら，給湯の調子が悪いから見てもらう予定だったわよね」
「今週末だったはずです。……柴田先生。あのバン，怪しいくないですか？　業者さんなら，車体に会社名が書いてありますよ」
「それもそうねぇ」
「保護者のとかじゃね？　」
「だったら，憶えてるわよ。大体，あんな業務用の車で送り迎えする親御さんはいないもん」

そう首を傾げた時だった。
私のピンクエプロンが僅かに引っぱられ，後を振り返る。

「結花ちゃん？　」

細い指先を真っ白にして，エプロンの端を握り締めていた。
大きな目を見開き，呆然と固まっていた。

「結花ちゃん！　」

そのただならぬ様子に，思わず大きな声が出てしまった。

エプロンを握り締める細い手を上から握り締めると，ようやく顔を上げて呟いた。

「あれ，お父さんの車だよ……お母さんと離婚して，もう会わない約束したのに……何でいるの？　先生，何でお父さんがココに来るの？　」

脳裏に，結花ちゃんの家庭調査票が蘇る。

そうだ。

結花ちゃんの家は母子家庭だった。

思わず，震える肩を抱き寄せた。

「巧くん。ちょっと追い払ってらっしゃいな」

「え……俺？　」

まるでゴキブリ退治をお願いするように言うと，柴田先生は恵比寿様のような笑顔をみせた。

「大丈夫よ，このお兄ちゃん達がいるもの。一応，お母さんに連絡しましょうかね。お母さんの携帯番号判る？　」

「ほら。山田，さっさと追い払ってよ」

「俺だけかよっ。1人で行くのか？　」

「さっさとする！　」

山田をテラスから叩き出し，ざわめく子供達に微笑みながら成瀬さんの手をひっぱる。

「車で来たんでしょ？　裏口に回して」

「デートのお誘いなのかな」

「馬鹿。柴田先生。念のために，結花ちゃんを弟さんの保育園へ

送って行きましょう。そこでお母さんに引き取ってもらったらどうでしょう」
「そうね。……そうかも。その方が安心よね」
ここで追い払われた父親が，弟がいる保育園に行くかもしれない。保育園なら，沢山いる保護者に紛れやすい。事情をあまり知らない保育士が弟さんを引き渡すかも知れない。
結花ちゃんの前，隠した意味を素早く察した柴田先生が頷いて決断を下す。
「結花ちゃん。荷物まとめてらっしゃい。あとの連絡はしておくから，遊佐先生は保育園に事情を説明してくれるかしら」
「はい。でも，児童館は」
「巧くんに手伝ってもらうわよ。暇そうだし，大丈夫でしょ」
山田の予定は勝手に決められ，慌しく裏口から外へでる。
「センセ……」
風に乗って聴こえた微かな怒鳴り声に，繋いだ細い手を握り締める。
「駅に近い大葉保育園だよね？　ちょっとしたドライブね」
「お嬢様方。カボチャの馬車で申し訳ないのですが，お乗り頂けますか」
成瀬の気の利いた言葉に，ようやく結花ちゃんはクスリと笑みを浮かべた。
「ねずみの従者にしては，イケメンさんだね。ね？　遊佐センセ」

第6話　ネズミの従者達？（後書き）

児童館で学童保育が出てきますが，あまり詳しくないまま描いています。

そのせいで色々と現実と違うところが出てきると思いますが，温かい目で見てくだされば…（汗）。　修正受付中ですっ。

次回　2月2日　水曜日に更新予定です。

第7話　真面目かな？（前書き）

前回に引き続き，『離婚』『親権』などという言葉が出てきます。
あまり深くやるつもりはありませんが，その話題を避けたい方はご遠慮下さい。

第7話　真面目かな？

「離婚理由は私も母親からしか聞いてないので，判りませんが……。よかったらどうぞ」
「ありがとうございます」
「頂きます」

園長先生自ら，冷蔵庫から冷えたお茶を出される。
職員室の隅に置かれた応接セットに，私と成瀬さんが腰掛けて事情を説明する事もなかった。
柴田先生が電話連絡で，大体の事情を説明してくれたらしい。
私達が駆けつけた時には，弟の陸人くんは職員室で小池先生に絵本を読んでもらっていた。
成瀬さんと一緒の私に驚く小池先生と，春の異動で大葉保育園にいた事を知らなかった私は，酷く驚き立ちつくしてして。
そして，思わず大笑い。
その姿を見て結花ちゃんもすっかり安心したらしく，今はお絵かきをする陸人くんの横で宿題を広げている。
真ん中に大きく自分らしき男の子を描き，両脇に髪の長い『女の子』だろう人を描く。家族の絵かもしれない。
母親にも連絡は届いているから直に迎えに来るだろう。

「親権の争いがまだ残っているようなんです」
「親権，ですか……」

子供がわからない言葉を使い，会話をするのは気が重い。
親の離婚で子供が翻弄されるのを，いくつも見てきた。
離婚の理由は様々だけど，目をおおうような修羅場もあるけれど。
この場合は何だったんだろう。

不倫なのか，ＤＶなのか，それとも家計の崩壊による夫婦関係の亀裂だろうか。
結花ちゃんは，親が争う姿を見ているのだろうか。
ふと，先日の憂鬱そうな顔を思い出す。
私は学校での新学期特有の悩みだと思っていたが，そんな単純な悩みではなかったかもしれない。
鉛筆を走らせる小さな後姿を見ながら，思わず唇を噛む。
私は，何も判っていない。何も見ていなかった。何も出来なかった。

「親権は，今は母親なんですよね？」
「もちろんです。ただ，養育費の問題もあるようですね。まだ裁判所のお世話になっているようです」
「では，今回のような問題がまたあるかもしれないという事ですか」
「そうですね。当面は気をつけていきましょう」

引渡しは必ず母親と確認する事。
母親以外の場合は，即電話で確認する事。
その他諸々を確認している最中だった。

「陸人！　結花！」

ドアが壁に当たり大きな音を立てて開かれた。
髪を乱した女性が駆け込んでくる。

「ママ，今日は早いんだぁ」
「お仕事大丈夫なの？」

無邪気に飛び上がる弟と正反対に，結花ちゃんは心配げに立ち上

がった。
その二人に崩れるように二人をかき抱いた。一瞬でも早く，抱きしめる為に。
そのまま，床に座り込む。
二人の柔らかな髪に顔をうずめて，母親が深呼吸をした。何度も，何度も。

「ママ『ぎゅう』しすぎだよぉ」
「ねぇ，ママ……」
「心配かけたね……もう，もう大丈夫だからね」

目元に皺をつくって微笑むその姿は，とても綺麗だ。くたびれた事務服のポケットからハンカチを取り出し，軽く目元を押さえてから立ち上がる。

「ご迷惑をおかけして，申し訳ありませんでした」

髪は乱れ，真っ青の顔色。急いだのだろう，足元はスリッパも履いていない。
背筋を伸ばし，子供達二人の手を繋ぎ，凛と前を見据えていた。

赤とオレンジの灯火が流れていく。光の川。家路を急ぐ人。仕事先から戻る人。出かける人。
色んな気持ちをのせて流れる光の川。その中でぼんやりと流されていく。
頭をガラスにくっつけると，心地よい冷たさが伝わってくる。

「疲れた？　」
「うん」
「どっか，お茶してく？　」
「……まだ勤務中でしょ。っていうか，成瀬さんこそ仕事は？
巻き込んだ私が言うのもナンだけど」
「ちゃんと連絡しておいたから大丈夫だよっ……と，ごめん。ブレーキ」

前方の信号が赤に変わり，車列のスピードが落ちる。
ブレーキで前に微かに引っぱられるまま，私は窓ガラスから離れて右に座りハンドルを持つ人を見る。
薄暗い車内に，対向車のライトが駆けていく。一瞬光で照らされた横顔が，不意に私を見た。

「そんなに自分を追い詰めた顔しちゃ駄目だよ」
「……私が？　」
「何か色々考えてるんじゃないの？　遊佐ちゃん真面目だから」
「真面目かな」
「真面目だよ」

首をかしげ，小さく笑う。
もっと事態が悪くなる前に，何で気づかなかったんだろう。結花ちゃんの心の変化に，気づかなければいけなかったのに。
真面目，か。真面目でも，どれだけ真面目でも，子供の信号に気づかなければ意味がない。
私は，無能だ。
自分の無能さにだけ，ようやく気づいてウンザリだ。

「すっかり，遅くなったね」
「……あぁ」

信号が緑に光る。
進みだす車は，とても前向きで。
赤色の光の残して走っていく車の列を，ただ目で追っていった。
私，何やってるんだろ。

「総員突撃ぃー！」
「キー！　」
「キキキーッ」
「キッキー！　」

マイクの前で，若者が奇声を発している会議室。
これ，廊下に音が漏れてたら壮絶に恥ずかしい。外に出て，うっかり隣の部屋にいる人と顔をあわせたらどんな顔したらいいんだろう。
そんな恐ろしい事を考えながら，マイクの前で汗を流しながら奇声を出し続ける男性陣を眺めてしまう。西脇くん，雑魚キャラなのに手を抜かずに叫ぶ姿がいじらしい。
せっかくの休日の午前中から，フジモモジャーの音入れ作業だなんて。でも，この人たちは楽しそうだ。
お天気もいい，行楽日和っていうのに。
窓から見える生命力溢れ輝く新緑の木々と室内での騒動を眺めて苦笑い。

「な，何と言う数だっ」
「力を合わせて，いくぞ！　ホワイト・ブロッサム～」
「ピンク・ブロッサム～」

「「サンダー！！！」」
「キッキー！！！」

ふむ。『フジレンジャー　ここでブロッサムサンダーの決めポーズ』『アブラムッシー　ここで一旦弾き飛ばされるように』……と。

脚本を目で追いながら，小さく溜息。

とうとう，音入れになってしまった。本当，何やってるんだろう私。

「ふはははは っ。今日の我らムシキズムは一味も二味も違うのだ」

居酒屋でのんびりしてた大本くんが，腹の底から響くような声を出した。その迫力は，間違いなく未就学児の中には泣く子が出るに違いない。うん，泣くね。

鼻の穴を獅子舞の獅子のように広げて悪役らしい口上を述べていく。

「合併に，この町の住民は不安を抱えておる。住民サービスはどう変わるのか。従来の公共施設は使えるのか。何より，住民税はどう変わるのか。そうであろう！　ここにいる大人達よっ」

おいおい。

「この不安は我らのエネルギーになるのだーー！　」

「住民サービスは変わらないのに！　」

「相互利用により，サービスは向上されるんです！　何より住民税は合併前から同じ基準です！　ムシキズムの言う事は間違っています！　」

「ここにいる大人の皆さん。どうか私達の言葉を信じてくださいっ　」

どうなのよ……この脚本は。

「無駄よ無駄！　今日こそムシキズムが桃花町を支配するのだぁあ」

「うわあああ！」

「ぐわぁああ！」

山田……眼鏡が曇ってる。なのに澱みなく台詞を言い熱演して手で宙を握り締める。

暗記，してるのね……。

思わず笑い出しそうになる口元を両手の平で抑える。

堪えろ私！

ここで余計な音が入ったら，みんなの熱演が台無しになってしまう！

小刻みに震え続ける肩。痙攣する腹筋。

早く，酸欠になるまえに早く切ってぇ！

思わず涙目でみんなを睨む。

「……っ」

一瞬の静寂。

マイクを囲んでダンゴな状態の男達が固まった。

ブッチンと音を立ててマイクの電源が落とされた途端に，津波のようにみんなが押しかける。

「そんなに感動されるなんて！」

「俺達こそ感激だよっ」

「良かったなぁ。ここまでやってよかったなぁ」

……感動じゃなくて，笑ってたなんて言えない。
曖昧な笑みを浮かべて，目元の涙を抑える。
言えない。
あまりにばかばかしい光景だったから笑いを堪えてたなんて，言えない。

第7話　真面目かな？（後書き）

次回　2月9日　水曜日に更新予定です。

第8話　トラボルタ？

「何で逆立ちしてるの」
「倒，立，です」

逆さの山田が，不思議そうに首を傾げた。
心臓が耳元でバクバクと脈打ち始める。限界が近いかも。
おかしいなぁ。学生の時は一時間ぐらい平気だったのに。

「準備体操？　」
「みたいな，感じ，かなっ」

壁を軽く蹴って，床に戻る。
体中の血流が，正常に戻ったのを喜びだす感覚。流れ落ちていく血を感じながら，タオルを取り出す。
他のメンバーは柔軟体操もそこそこに，本番用らしき漫才の練習も始めている。
何でやねん。ちゃうわ。何でやねん。
午前中の音入れ作業も大変だったけど，午後も丸ごと使っての『殺陣』シーンの製作だ。
音入れで叫んだのも恥ずかしかったけど，今回はふざけてられないな。
ここで効果音を入れるタイミングもチェックするらしい。
成瀬さんはヘッドホンをして金髪の音響担当の人とずっと頭をつき合わせている。
そういえば，飲み会の時のメンバーが殆んど来ている。そして，互いの動きをじゃれあうように決めていく。
メモをとり，カメラを回して動きを確認している。本当に，みんな本気だ。

こんな中で久々に本格的に体操するのが怖くなる。
隣接した市民体育館に広げたマットの白さが懐かしくも，恐れを感じる。
高校の時以来のマットのニオイに，少し興奮しているのかもしれない。

「やばい。学生の時より体が動かない感じする」
「本格的なのはやらないよ。アマがプロ並に魅せるのは難しすぎるから，出来る事を丁寧に楽しみながらするのがモットーなんだ」
おぉ。まともな事言うじゃない。
思わず山田の顔を見ると，直ぐに視線を反らして呟いた。

「ただ怪我しても労災でないから，気をつけて」

本当に労災，出ないの……？　ショックだ。
リスクを負った時のフォローもないのかい。
これは本腰を入れて準備体操せねば。
冷たい体育館の床に座り，ゆっくりと開脚。
体重のかけかた，力の入れ具合。その感覚を思い出させるように，ゆっくりと体の奥と会話していく。

「何してるの」
「柔軟体操。これやらないと，ね」
横で突っ立ている山田は『なるほど』と頷く。

「やっぱり真面目だ」
「……何よ」
「浩介に少し聞いた」

「……あぁ，成瀬さんにね」

先週の結花ちゃんの件だろう。

そういえば，あの後はお礼もそこそこに帰宅してしまった。

子供達は柴田先生と山田が見てくれて，無事全員帰宅した後だったし。私も何だか疲れきっていて，最低限な言葉しか言えなかった。

悪い事を，してしまった。

「あれから，どう？　あの女の子は落ち着いた？　」

「うん。アレ以来父親は来てないし。とりあえず表面は落ち着いて生活してる」

「そうか」

見上げる山田の口元が，ほんのりと緩む。

穏やかに。

「よかった」

「うん。ただ，弟くんがね」

「保育園にいる弟？　」

「そう，弟くん」

少し勢いをつけて，体を前に倒していく。

少しずつ。少しずつ。

「離婚の意味が判ってないらしくてね。父親に逢いたいみたいで，今回みたいな事が，あったら，自分から父親側に，行っちゃうかもしれない，って小池先生が。小池先生憶えてる？　飲み会で」

「あぁ」

「弟くんとこの保育園にいるんだけどっ，なんだか最近，落ちこんで，いるみたい，で……何？　」

「いや，その姉弟は幸せだなぁって」
穏やかな笑みを浮かべて，私を見下ろした山田が微笑みかける。
少しくたびれたジャージの彼が眩しい。
「遊佐さんに，そこまで気をつけてもらってさ」
「何がよ。私，何も出来なかったじゃないの」
「何も出来なかったかもしれない。出来ないかもしれない。でもさ，こうやって連携出来てるじゃないか」
思わず柔軟を止めた私の背を，軽く叩いた。
冷たく，骨ばった大きな手の感触が背中に染みていく。
「仕事じゃないのに，そうやって一生懸命に連絡取り合ってるんだからさ。やれるだけやってみなよ。後悔はしたくないんだろ」
「……うん」
「俺に出来る事なら，何でもやるからさ」
「うん」
市役所の山田と，児童館の私に，仕事での接点はない。
出来る事なんざ，ない。
でも，その言葉から伝わる気持ちが嬉しくて，嬉しくて。
少し目が潤んだまま，微笑み返す。
「うん……私も，頑張るよ。出来る事，やってみるよ」
「じゃあ，さっそくポーズを決めようか。少し考えてきたんだ。やっぱり女の子が真似したくなる動きがいいかなぁって思うんだけど」
体育館に響く声。声。声。

なんでやねん。ちゃうわ。なんでやねん。
唐突に，山田が壁に置いたスポーツバッグを抱えて戻ってくる。
そして，タオルやペットボトルの間から見慣れた青いファイルを取り出した。
手馴れた仕草でページを流し，数枚の紙を冷たい体育館の床に並べだす。そこに書かれた丸と棒の人型は，ありえない奇妙奇天烈な形で描かれている。

「フジエンジェルだから，こう花を現す手の動きとか。大きく腕を回して羽をイメージさせたりとか。遊佐さんはどう思う？ 」
「どう，どう思うって……っ」

あぁ，もう。
私って馬鹿だ。阿呆だ。学習能力ゼロだ。
山田の頭の中にはフジモモレンジャーしかないのに！！！
優しさとか，思いやりとか，励ましとか，愛情とか，心配りとか，そういう温かなものを感じてしまった私は阿呆だった！！！

「山田の馬鹿ーー！！ 」
「はぁ？！ 」

本当に，こいつ馬鹿だ。一直線で，堅物で，一生懸命で，誰に対しても変わらなくって，同じだけ情を注いで。
多分，一緒なんだ。
フジモモジャーに賭ける情熱も，人にかける情愛も，仕事にかけるひたむきさも，山田は全て一緒なんだ。
何事にも手を抜かず，相手にぶつかる。どんな色眼鏡も使わず，真正面から相手を見据える。
だから，だから私は山田に嫉妬をしてる。
もっと私を見て。もっと私をかまって。もっと私に触って。もっ

と一緒にいて。
私は山田が欲しいんだ。そのひたむきさを，全て欲しいんだ。
ようやく気づいた。私，やっと自分の気持ちに気づいた。気づいちゃったんだ。

「巧，何やってるんだよっ」
「何って，柔軟体操手伝ってたんだけど。で，フジエンジェルのポーズを決めようって……」

首にヘッドホンをかけたまま，成瀬さんが駆けて来る。
眉を吊り上げ山田を睨む成瀬さんの顔を見て，確認する。
私が好きなのは，成瀬さんじゃない。

「遊佐ちゃん，どうしたの。大丈夫？　山田，また何か変な事したんだろ」
「してないっ。勝手に決め付けるなよっ」

私は，山田が好きだ。
不器用で，どうしようもないオタクだけど。
山田が好き。

「何もしてないの。山田は，何もしてない。私の勘違いだから，ね？」
「本当？　本当に？」

優しい成瀬さん。
細やかに気を使えて，気の利いた，かっこいい成瀬さん。
でも，それだけだ。
私が本当に欲しいのは，いてほしいのは，横にいて欲しい人は，成瀬さんじゃない。

肩に置かれた成瀬さんの温かな手をどかして，微笑む。
「ごめんね」
心配ばかり，かけさせてゴメンね。
好きって気持ちをもらったのに，ゴメンね。
「成瀬さん，ごめんね」
「遊佐ちゃん……」
「山田も，ごめん。うん，ポーズを決めるのね。こう？」
山田の手の中から紙を抜き取り，腕を回す。
何でも，やろう。
傍にいられるのなら，何でもやろう。
「お！　フジエンジェルのポーズ決めるのか？」
「決め文句は何にしたんだ？」
「こう，女王様っぽいのがいいですねぇ」
口々に勝手な事を言いながら，みんなが集まってくる。
少し，心配げで，少し安心した顔をして。
心配かけてゴメンね。いつも嫌だと駄々を言っててゴメンね。
私，やってみるよ。
みんなと，山田とやってみるよ。
「腕は交差して上で決めて」
「足はどうする？」
「モデル立ちでしょ，やっぱ」
「決めて！　ここはかっこよく！」

みんなが口々にいう動作をまとめたら，どうしてこうなるんだろう。

苦笑いをしながら，大きく腕を交差してモデル立ちをして，左手を腰にあてて右手で天を指す。

「フジエンジェル，参上！」

サタデー・ナイト・フィーバーのジョン・トラボルタじゃないか。

何でこうなるかなぁ。

第8話　トラボルタ？（後書き）

個人的には，トラボルタよりｐｅｒｆｕｍｅのチョコレイト・ディスコがいいな（笑）。

次回，１６日の水曜日に更新予定です。

第9話　前向き思考？

「なぁ，これってフジモモジャーになったんだよな。明日行く？」
「行くよ。絶対に行く！」
「い，いや……行かなくていいよ」
「何で遊佐センセーが止めるんだよっ」

止めるわよ。来ないでよ。
なんて言えない。苦笑いして忠告だけする。

「西市民プールって，校区外でしょ。行くなら保護者と一緒に行きましょう」

男の子達は顔をしかめて「面倒くせぇ」といいながらも，宿題そっちのけで親を連れ出す計画を練り始める。
男の子ってのは，何歳になっても戦隊ものに興味があるんだろうか。
山田も好きだから，あんなに一生懸命にやっているんだろうし。
小学生達の勉強を見ながら溜息をつく。
明日いよいよフジモモジャーのデビューだ。
古ぼけた児童館の壁に張られた市民お知らせポスターの一番下に書かれた文字と写真が，私をとことん憂鬱にさせる。なんで写真付きなんだろう。マスクの下の人物を知っているから，妙な感じ。
職場にまで進出しないでほしいなぁ。山田と成瀬さん。
夕焼け色に照らされたポスターを眺め，溜息一つ。

「センセー，何作ってるの」
「うん。照る照る坊主」

宿題をする子供たちを指導しながら，職員室の片隅にあったボロ布を丸めていた。
舞台となる市民プール横の文化会館前の大広場は野外ステージだ。
雨天中止。

「いいなぁ。私も明日プールに行きたかったなぁ」
「結花ちゃんも，フジモモジャーを」
「違う！　それは陸人！」

そりゃ失敬。
真っ赤な顔して否定し，男の子達を指差して「一緒にしないでよっ」と一喝。
あらら。
男の子達は心なしか顔を赤くしてる。
可哀相に。

「陸人が好きなの。前のモモハナジャーから見てるの。結花じゃないからね」
「そうか。陸人くんが見たがってるんだ」
「うん。昨日から駄々こねてる。お母さんお仕事だから無理なのに」
「そりゃ大変だ」
「おばあちゃんにお願いしようかなって」
「それはナイスアイデアです……よし。出来た」

照る照る坊主の首を締め上げ，可愛らしいスカートラインを作り上げた。
備品の油性ペンで顔を描き，窓際に吊るす。
うん。我ながら上出来だ。

「センセー。照る照る坊主……逆さまだよ？」
「駄目だよぉ。雨降っちゃうよ」

山田の為に，みんなの為に，頑張ったけどね。
あの衣装を着るのだけは抵抗あるのよ。
なれば，こそ。

「これでいいの」

雨天中止。
これしか落としどころがないじゃないの。

「頼むわよ。照る照る坊主」

男の子達が椅子を持ってきて照る照る坊主の向きを変えようと四苦八苦するのを眺めながら，白く愛らしい顔に念を込める。
雨降らせなきゃ，焼いて捨てるわよ。

「焼き捨ててやる……」
「ゆ，遊佐さん？」
「はい。何か」

雲一つない青空。新しい朝が希望を連れてやって来た。やって来ちゃったよ。
思わず，そんな美しく晴れ渡った空に呪いの言葉をかけていた私。
唐突な言葉に振り返ると，顔を引きつらせた大本くんと顔を赤ら

めた西脇くんがいた。あ，西脇くん鼻息荒い。珍しいな。

「今，なんとっ。遊佐さんっ。今なんとっ」

「気のせい。何もないから。はいはい。リハやります。真面目にやります」

「よ，よろしくお願いします！　だからピンヒールのブーツで決めてくださいっ」

「だからピンヒールは履けません。それ，ヒールの高さ7センチとかない？　側転とかするのに怖すぎるよ」

「そこを是非に！　」

フジエンジェルのブーツ，市販のものに少し手を加えてある。打ち合わせでヒールが高いものは絶対無理って言ったのに，西脇くんはピンヒールを熱心に薦める。

そりゃ，足のラインは綺麗に決るだろうけどね。アクションシーンで捻挫しそうだ。

手間がかかっただろうに，二つのブーツには同じように藤の造花がワンポイントで小さく縫い付けられている。

「西脇の悪い趣味が出たみたいだな」

「成瀬さん，すみません。こいつ本当馬鹿だから」

清清しい早朝の空気に似合う微笑みを浮かべて，成瀬さんが音響ベースからかけてくる。

天使な西脇くんと，爽やか成瀬さん。ここだけ美形度，めちゃ高いです。

「西脇くん。申し訳ないけど，怪我したら終わりだからさ。ヒールは駄目」

「駄目ですかぁ」

「俺も遊佐ちゃんのピンヒールは捨てがたいけどね。それはアクションがない時に履いてもらおう」
「それはナイスアイデアですっ」
勝手に決めないで下さい……。
ただでさえ，ヒラヒラに超ミニのスカートで恥ずかしいというのに。
軽い眩暈を起こす私の前で，美形な二人は恐ろしい会話を繰り広げる。
変態度，高すぎです。
冗談じゃない。
「じゃあ，衣装の最終チェックしときますからっ。裾上げしときますっ」
「西脇くん，グッジョブ！」
「これ以上ミニにしないで下さい……」
「西脇，もうやめろ」
引きつった顔のまま，大本くんが西脇くんを引きずっていく。た，助かったよぉ。
何なの，あの二人は。西脇くん，何か性格変わったような気がしたけど……気のせいか？　気のせいなのか？
「はい，フルマスク。かなり視界が狭まるから，リハで被って見たほうがいいよ」
「本当に被るんですね……」
「顔隠さないと恥ずかしくて出来ないと思うけど」
それもそうだ。
最もな指摘に，慌てて髪を結い上げる。

ピンクと薄紫の淡い色を使って曲線中心に形作られているソレ。
目の所は黒のプラスチックで視界が若干暗くなる。
これで側転にバック転は怖いかも。
思わずマスクを睨んだ私のうなじに，指の感触。

「成瀬さん？」
「ここまでやるなんて，正直思わなかった」

唐突な言葉に振り返る。
鳶色の瞳が，微笑んでいた。

「見た目や世間体ばっか気にする子は多いし。プライド高いし，集団と同じことしかしようと思わないし」
「そんな子ばっかりじゃ，ないよ」
「うん。そうだね」

ポニーテールに結い上げた髪。後れ毛で遊ぶように，成瀬さんの指がうなじを触る。
少し節が大きな長い指が触れる。

「聞いていい？　何で，ここまで付き合ってくれたのかな」

それは，私が一番恐れている質問。
気づいた？　私の肩が揺れた。息を呑んだ。視線を，外した。

「俺がいたからって，そう思いたいんだけど……そう思っていい？」

何で鳶色の瞳はそんなに哀しそうなの？
いつもの自信が，消えているの？

なんで，判るの？　自分でも戸惑ってる気持ちに，何で気づいたの？

初夏の早朝に冷たい風が，私達の間に流れていく。

流れた風は，もう戻ってこない。流れていくだけ。

「山田が，いたから」

首を振った。ポニーテールの先がうなじに触れる成瀬さんの手を払う。

真っ直ぐに鳶色の瞳を見つめた。

心臓の音が体に響く。私の言葉が，成瀬さんの体に響いていくのを感じる。

壊していく。もう，戻れない。

「多分，山田がいたから」

「うん」

「私に出来る事，コレしかないから」

「うん」

私と山田の接点は，フジモモジャーしかないから。

だから，私はここにいる。

雨を降らそうと願っても，フジモモジャーをやめようとは思わなかった。

私が山田に出来る事は，フジエンジェルになるしかないのだから。

「じゃあ，巧にはまだ告白ってないんだ」

「は？」

「なら，俺はここにいる」

「成瀬さん？」

何か，かみ合ってた歯車がずれる音が聞こえた。
鳶色の瞳が，満開の夜桜のように微笑んだ。
毒を妖艶に鳶色の瞳に溶かした笑み。

「遊佐ちゃんの横に，いつだっている。だから振られたらここに戻ってきて」
「成瀬さんっ」

この人，何て逞しいんだ。
振られた後の事まで考えられないのに，そんなフォローされて私はどうすべきなんだ。

「行っておいで。待ってるから」

手馴れた仕草で，マスクを被せられた。
息苦しいのは，きっとマスクのせいだけじゃない。
顔が暑いのも，マスクのせいじゃない。

「返事，待ってるから」

恐ろしい言葉とともに，慣れた手つきでロックの音がマスク内に響く。

「シーン3から始めるよー！　ここでフジエンジェル，登場しまーす。中田さーん，音お願いねー」

拡声器を使った須藤さんの声に反応して，やけにドスドスの低音と可愛らしいメロディーが流れ出す。
フジエンジェルのテーマ曲だそうで。
逃げられない。

サンダルを脱ぎ，大本くん達が持ってきたブーツを履いて軽くジャンプする。
やっぱりローヒールじゃなきゃ，動けなかった。
肘までである手袋をして本番の感触を確かめるべく，いざ。
私の本心をぶつける為に，いざ。
マスクごしに見る成瀬さんが，微笑んで手を振る。
この人当たりのよさそうな笑顔が曲者だ。
本当は強引で，策略家で，変態なのに。

「遊佐さーん！　軽くね，軽くこなしてね！」
「軽くこなして本番失敗したらどーすんのよっ」

こうなりゃ，やるわよ。やってやるわよ。
山田に言ってやるわよ。

「行くよーっ」

雨晒しで風格すら漂う据付のベンチにサンダルを置き，コンクリートの地面を蹴りあげる。
客席後方から全速力。
山田とがいる露天ステージ目指して，ベンチが並ぶ客席中央の通路を走り抜ける。

「安全確認！」

前方席なってから，スタッフが客席からの飛び込みを防ぐために両サイドに待機。
そこで一気に側転，バック転！
視界が回る。世界が回る。
そこは，私の新しい場所。

第9話　前向き思考？（後書き）

次回　２３日の水曜日に更新予定です。

第１０話　想定内か想定外か？

『化粧ポーチを肌身離さずにね』
朝の情報番組で言っていた今日のラッキーアイテムを，唐突に思い出して後悔している。
なんで今日に限って，占いが当ってるのよ。
私の顔，きっと崩れてる。
ファンデーションはあまり塗ってないけど，リハーサルでマスクの下は滝のように汗が流れ落ちた。きっと眉毛も落ちているに違いない。
なのに，この素ッピンに限りなく近い顔を山田に見せなくてはいけないなんて。

「マスク取れない？」
「う，うん」
「どうやって被ったの？」
「成瀬さんに，その，やってもらって」
「ふうん」

そんな，あっさり頷かないで。
一瞬，ブラックな私が頭をもたげる。
全体の打ち合わせが終わり，細部を最終確認するまでの僅かな時間。その時間に山田を何とか更衣室に割り当てられた会議室に連れ込んだものの。
まずはマスクを外す事を頼まなくてはいけないとは。
暑くて，苦しい。何よりも，フジエンジェルのマスクで告白するなんて哀しすぎる。
山田は私の葛藤を知らずに，マスクの下から手を入れた。
冷たい指先が，顎の下を掠める。

「慣れれば簡単に外せる。ほら」

金属音とともに，冷たく新鮮な空気が流れ込む。

ホッと息を付く間もなく，素早く顔をそむけた。

「今日は暑くなるらしいから，熱中症対策しとこうか。ちょっと待ってって」

素ッピンを見られると慌ててた私に一声かけて，山田の気配が離れていく。

そっとマスクを外して，室内に誰もいない事を確認。

タオルで顔を拭きながら，バックから化粧ポーチを取り出す。この間に眉毛を描かねば！

私史上最速の速さで眉を描き終わり，Tシャツが汗臭いことに気づく。

やばい。臭いのに告白なんて出来ないっ。

迷いなくTシャツをめくった途端だった。

「遊佐ちゃー！……おぉ」

「きゃああ！　」

急に開いたドアの向こうに，反射的にバックを投げつける。

「おぉ」じゃねぇよっ。

成瀬さんに見られた！　仕事用の色気のないブラを！

「いいもん見れたなぁ」

「どうしたんだ？　」

「いや。巧には見せられないなぁ」

「何だよ……それ，遊佐さんのバックじゃん。どうした？　」

「降ってきた」
「はぁ？　」

廊下から聞こえる間抜けな会話。
泣きたい。泣きたいよぉ。

「遊佐さん，入るよー」
「は，はいっ」

マッハの速さで着替えのTシャツを着終わったと同時，再びドアが開かれる。
成瀬さんの顔，にやけ過ぎ。自己嫌悪。

「顔，赤いね。やっぱり熱中症っぽいかな。眩暈とかする？　」
「それは，ないけど」
「そうか。一応，首筋を冷やしておこうか」
「水分も取っといたほうがいいよ。ここに置いとくから遠慮なく」
「いえ。大丈夫だからっ」

コンビニ袋からスポーツ飲料を二本，テーブルの上に並べながら微笑む。
この虫も殺さないようなお地蔵様の微笑みは，危険だ。
山田が冷却シートの透明フィルムをめくろうと四苦八苦してるのを横目に，成瀬さんは私の肩を叩きながら囁く。

「俺はベージュも許容範囲だからね」
「ーーーーっ」
「頑張ってね」

見られた。やっぱ見られた。

ショックでグルグル。部屋を出て行く成瀬さんを睨みながら，軽い眩暈。

「やっぱり，冷やしておこうかな」

「その方がいい。熱中症は危険だからね」

山田は私の葛藤を知らず，神経質な手つきで冷却シートをうなじに貼り付けた。

冷蔵庫に入れてあったんだろう。痛いほどの冷たさに思わず息を飲む。

「浩介の言う通り，本当に水分も取ったほうがいいから。ダイエットなんか気にしちゃ駄目だ。今日はどんだけ食べても太らないから」

「うん……」

「元気，ないね」

「そんな事ないよ」

「やっぱり，嫌かな」

唐突な言葉に，振り返る。

いつも自信たっぷりな山田。強引で引きずり回す山田。その顔に眼鏡がない。

意外なほど長い睫毛が，影を落としている。真っ直ぐな目元が，泳いでいる。

「俺達はこの町が好きで，戦隊ものが好きで，こんな事やってるけど……遊佐さんは違う。この町は仕事でいるだけだし，戦隊ものに興味はないし。騙すように仲間に入ってもらったんだし」

騙すように，ではない。脅されたんだよ。

そう訂正をしたくなるも，いつもと違う山田の様子に言葉を飲み込んだ。

「嫌だよね。でも，今日だけは舞台に立ってくれないかな。今日だけでもいいんだ」

「山田？」

「俺の勝手で巻き込んで，こんな事言って，ふざけてるって思うかも知れない。でも，今日だけは，フジモモジャーして欲しい」

真っ黒な瞳。

真っ直ぐな視線。

真っ正直な気持ち。

全て私にぶつかった。

「こんな事，馬鹿げてるって判ってる。戦隊ヒーローして，気持ち悪いって言われてるのも知ってる。でも，俺達が馬鹿やってくことで，少しでも子供達の記憶に残ってくれるならいいんだ」

熱い熱い，山田の気持ち。

「大人になって，自分の育った町の記憶の中に楽しかった想いが残ればいいんだ。そこから，故郷を想う気持ちが生まれればいいんだ。百人の中の一人でも，千人の中の一人でも，そんな想いが生まれればいいんだ」

本当に，どうしてこんなに真っ直ぐに考えられるんだろう。

「だから，遊佐さん。今日だけでもいい。フジエンジェルを演じて下さい」

私は，きっと山田には敵わない。
こんなに人の為に動ける人を，知らない。
私，やっぱり山田が好き。
目の前で頭を下げた山田に，そっと触れる。
触れたTシャツは，少し汗ばんでいた。
きっと，リハが終わっても走り回っていたんだろう。
今日の舞台を成功させる為に。手伝ってくれる友人達の為に。

「山田……私ね，私，そんなに嫌じゃないよ」
「遊佐さん」
「私，確かにこの町の出身じゃないし，戦隊ものファンじゃないけど，けどね……フジエンジェルはやるから」
「遊佐さん」
「私，だって，山田の事が，す」
「裾あげしましたーーーーっ」

好き。
その単語を口にしようとした途端に，ドアが全力で全開で開かれる。
飛び込んできた西脇くんは，天使の笑顔で駆けて来る。

「遊佐さーん！　見て下さい！　このプリティーな裾を！　これで曲線美ばっちりです！　」
「西脇くん……」
「こんなに上げるのか？　」
「これがキュートなんですよっ。見て下さい。この見えそうで見えなさそうな丈をっ」

台無しにされた。
渾身の勇気を振り絞った告白を中断させられ，私はその場に座り

込む。
男二人は，何事もなかったようにマニアックな会話を盛り上げていく。

「判ります？　このちらイズム！　」

わかんねぇよ。

「もう本番近いから，これ以上いじらなくていいからね」
「はいっ。今日の舞台で次回への改良点を探しておきますからっ。だから何でも言って下さいねっ。ね，遊佐さん！　」

次回への改良点なんていいから。
暴走する西脇くんは，山田の手にコスチュームを押し付けて去っていった。
少し困ったように笑う山田。眼鏡がないからか少し爽やかだ。
いつもの暗い雰囲気はない。

「それで，何？　」
「え？　」
「いや。俺の事がって，さっき」
「あ，うん，その，山田の……そう，山田の眼鏡がっ」

いきなり告白の続きは出来ない。思わず話をそらすと，左手を上げた。
困った時の癖で眼鏡を触ろうと左手を上げて，触るべきものがない事に気づいてもう一度苦笑い。

「眼鏡してたらフルマスク被れないから，コンタクトしてるんだ。変かな」

「かっこいい……」
「ゆ，遊佐さん？　」

バチバチ，睫毛が揺れた。
自分が零した言葉に，心臓が爆音を出して脈打つ。
急上昇する体温。吹き出す汗。乾く喉。

「あ，あのね！　山田，言いたい事があるの！　」

今しかない。
今言わずにどうする私！

「私，山田の事がす」
「ちわーっ。弁当持って来ましたぁ」
「あ，マスター」

軽い言葉と共にドアが開けられ，積み重ねられた箱の影からヒゲ面が満面の笑みが飛び出す。
うさぎ屋のマスター。人のよさそな顔が，凶悪に見えるよ。

「弁当の担当，浩介なんだけど」
「え？　成瀬くんに言われて来たんだけどなぁ。持ち合わせないから，山田くんところで会計お願いするって」
「そんなに俺も持ってきてないのに……困ったな。いくらですか？　」

判った。成瀬さん，確信犯だ。
悪魔の微笑みを浮かべる成瀬さんが目に浮かぶようだ。してやられた！　なんとしても告白させないつもりなのね。
財布から何枚か紙幣を出している山田の隣で，拳を握り締める。

「いつも無理言って弁当まで頼んですみません」
「何言ってんのさ。これが楽しみなんだからさ。これは差し入れ。勘定には入ってないからね」

マスターは本当に嬉しそうに顔を綻ばせて，ペットボトル数本も取り出してテーブルに並べていく。
不意に私を見て，そして山田を見て，不自然なほどニッコリと微笑む。
生温かい眼差し。

「そっか。うん。青春だなぁ。若いっていいなぁ」
「何言ってるんですか。マスターも若いでしょう」
「山田くん，いいよいいよ。お世辞はいいの。いやぁ，かわいい子入れたと思ったら，そういう事になったのねぇ。遊佐さんだったけ？　そんなに睨まないでよ。かわいい顔して怖いなぁ。じゃあ，客席から見てるね。中田さんは来てる？」
「え？　もちろん。中田さんいないと，音響出来る人いないですからね」
「じゃあ，ちょいとお邪魔してるよ。今度のクラブイベント教えてもらわなくちゃ。じゃあねぇ～。頑張れ女の子！」

この人にはバレた。
私が山田が好きで，成瀬さんが私を好きな事，ばれてしまった。
しかも散々にいじられてしまった。

「マスター，どうしたんだろ。遊佐さん，何かあったの？」
「……っ」

世の中には，マスターのように鋭い人もいるのに，どうして同じ

男でも山田はこうにも鈍いんだ！

「あのね！　さっきから言おうと思ってるんだけどね！」

言ってやる。今こそ言ってやるっ。

「山田の事が」

「あ，電話鳴ってる」

二人の間に強制的に入り込んだ電子音。

ご丁寧に山田が差し出した私のバックをひったくるように掴んで，中から電話を掴み取る。

誰よ！　この一世一代の時を邪魔する奴は誰よ！

呪ってやる。

心の中で呟きながら液晶画面を覗いて勢いよく怒鳴る。

「小池先生！　今いいとこなんだから邪魔しないで下さい！」

「『そっちに陸人くんいる？！』」

「……陸人くん？」

唐突な言葉に，怒鳴り込んだ勢いを削がれた。

電話口の向こうから，泣き声が聞こえる。

「『陸人くんよ！　結花ちゃんの弟の！　じゃあ，結花ちゃんはいる？！』」

「小池先生，何があったんですか」

「『今，連絡網が回ってきて！　お母さんの実家に，父親が押しかけてきたらしいの！　陸人くん連れてったって！　探してたら結花ちゃんまでいなくなちゃって！　遊佐先生，今どこ？　そこにいる？！』」

灼熱の熱さで駆け巡っていた全身の血が凍りつく。
父親に陸人くんが攫われて，結花ちゃんまで行方不明。
恐れていた最悪の事態だ。
何てこった……。

第１０話　想定内か想定外か？（後書き）

すいません……べたな展開です。ここでまだ話を終わらせたくないんで（苦笑）。

次回　３月２日　水曜日に更新予定です。

只今１２話まで描きました。う～ん。もうちょっと頑張る。

第１１話　予定は未定？

「迷子のお知らせをします。藤里南小学校の香坂結花ちゃん。香坂結花ちゃん。イベント本部席まで来てください。繰り返します。迷子の……」

青い空の下で流れるアナウンスを，奥歯をかみ締めながら聞き流す。

晴れ渡る青空に，上昇する気温。プール開きには最高の日和。時間と共に，人は多くなっていく。

プール目当ての小学生や家族連れ。イベント目当てのカメラ小僧まで。

「こんだけ人が多いと，探せないな」

「警察には通報してあるの？　」

「えぇ。とりあえず，結花ちゃんは探してくれるそうです。でも……」

人手が足りない。

相手は大人だ。子どもを強引に車に乗せる事も出来る。そうなれば，こちらは手が打てない。

せめて，国道に検問でも張ってくれればいいんだけど。結花ちゃんは攫われたかどうかも確かな話ではない今，それは望めないだろう。

攫った相手は父親だし。

奥歯をかみ締めて，前方の人垣を睨む。

いったい何処にいるんだろう。

クラブ並みに鳴り響く音が耳障りだ。何でヒーローイベントにエレクトロ系の音楽流してんのよ。

「山田さん，予定はどうする？　出来る？」

本部席端の音響ブースに立ち尽くした私達に，中田さんが冷静な声をかける。

ヘッドホンを首にかけ，神経質そうにマックのパソコン画面をなぞりながら山田と私に視線を投げかけた。

控え室で電話をもらって飛び出した私達は，市民プール周辺を走り回った。

けど，増える人の波にもまれるだけで判らなかった。

迷子のアナウンスをしてみたものの，何も変わらない。

「あと30分か」

「中止なら早く決定しないと。遅らせますか？」

「そういう訳にもいかないだろ。市長，来るんだろ」

「あのクソじじぃ……」

山田の口から恐ろしい単語が零れたけど，そ，それはスルーしていいんだよね。

慌てて周りの顔を見ると，目が泳いでる。あ，やっぱマズイんだ。聞かなかった事にしておこう。

「遊佐さん。気になると思うけど，ここはとりあえず舞台をやろう。客も集まってるし，ここで中止はもちろん延長も出来ない」

「判るよ。判るけどっ」

「中田さん，もう一回BGM切って。迷子案内をもう一回入れてもらおう。遊佐ちゃんも，それでいいね」

成瀬さんの言葉に，唇をかみ締める。手の中の携帯電話を握り締める。

何も出来ない。何も出来ずに，結花ちゃん達が消えていくのを感じるしかないの？
私，何も出来ないの？
「じゃあ，もう一回迷子案内かけます」
「遊佐センセー！！」
唐突な呼び声に，顔を上げる。
「遊佐センセー！！」
聞きたかった声に，走り出す。人波の向こうに，見知った小さな顔が見え隠れしている。
「結花ちゃん！！」
「遊佐センセー！！」
手を伸ばし，細い手首を掴み，かき寄せ，肩を抱きしめる。
よかった。よかった。頬に触れる柔らかい髪の感触に，一気に安心する。
よかった。
「センセー，陸人がっ」
「聞いてる。よかった。とりあえずお母さんに連絡しようね」
涙で濡れた結花ちゃんの頬を指で拭い，握り締めてた携帯を渡した。
山田や成瀬さん，須藤さんも中田さんも，不安げな顔が綻んだ。
よかった。これでとりあえず，舞台が出来る。
そう安堵した途端だった。

「あ～！　結花見つけた～。さっき迷子案内かかってたぞ～……っ。げ！　遊佐センセー」
「尚吾くん達……保護者は？　」
暢気に歩いてきた尚吾くん達が，私の顔を見て回れ右をしだす。
周りに大人の気配はなし。
さては子どもだけで来たな。
「校区外だから保護者同伴って言ったでしょう？　どういう事なのっ」
「えーーーっ。結花が迷子になったみたいだから，弟のいた場所に連れてってあげようと思ってたのに～」
首根っこを捕まえた途端の言葉に，思わず手がゆるむ。
すかさず逃げ出そうとする尚吾くんに，結花ちゃんが掴みかかる。
「陸人いるの？！　」
「お，おぅ。あれ，そうなんだろ？　」
あまりの勢いにたじろぐ尚吾くんが，同伴の友達を振り返る。
時々児童館に遊びに来る，見知った顔だ。
「うん。見たことあるもん。何だっけ……りくと，だっけ？　」
「やっぱりココに来てたんだ！　どこで見たの？！　」
「う，うん。妹と保育園一緒だからさ。さっき南駐車場前で見たよ。お父さんかな。手ぇ繋いで歩いてたけど」
その言葉に昨日結花ちゃんが言ってた事を思い出す。
弟の陸人が市民プールの戦隊イベントに来たがっているという事

を。だから，結花ちゃんはここへ探しに一人で飛び出したのだろう。
点と点が線となって繋がる。
そして，結花ちゃんと顔を見合わせて立ち尽くす。
どうする私。

「ちょっと。あと３０分なんだけど」

中田さんの冷静な声に，立ち尽くす。
どうする私。今すぐ走っていきたい。陸人くんを保護したい。でも，舞台の時間も迫っている。
３０分は，着替えて最終打ち合わせでぎりぎりの時間だろう。

「遊佐センセー！　」

私の手を握り締める結花ちゃんの小さな手。涙を零す瞳。
駄目だ。このまま情に流されたら駄目だ。
でも，このまま見過ごせない。見過ごせるはずない。どうしよう。
どうにかしなきゃ！

「そういやあ，どうして遊佐センセーがここにいるの？　」

突拍子もない尚吾くんの言葉で，雷が落ちた。
……そうだ。何で私はここにいるのだろう。ここにいるからこそ，私達だから出来る手段があるじゃないか。
頭に浮かんだとんでもない計画を，閃いた奇天烈な提案を，実行しない手はないじゃないか。

「須藤さん……台本，今から変更しましょう」
「はぁああ？！　」

音程を外した絶叫を，私は聞き流す。

「結花ちゃん。陸人くんは絶対保護するから大丈夫。まずお母さんに連絡してね。中田さん。音響担当って事は録音したの，このパソコンに入れてあるのよね」

「そ，そうだけど」

「じゃあ，せりふをぶつ切りにして編集も出来るんでしょ」

「そりゃまぁ……今からするの？！」

「必要なタイミングで停止させて」

「えぇえ？！　無茶苦茶言わないでくれよっ」

金髪をかき乱しながらも，パソコン画面とにらみ合ってくれる中田さん。あなた好い人です。

呆気にとられる顔を前に，指示を飛ばす。

「尚吾くん達。ここに子どもだけで来たことは見逃してあげるから，ちょっと言う事聞きなさい。」

「ちょっと遊佐さん」

「陸人くんとお父さんにね，戦隊イベントの席が取れたからって誘い出してらっしゃい」

「えぇえ？！」

「須藤さん，今から席作って」

「そんな無茶な」

「2つぐらい何とかなるでしょ。関係者席とか紙で貼っといて」

「ずるい！　ちゃんと誘ってくるから俺達の分も欲しいなぁ」

「絶対に連れて来るのよ。じゃあ3名追加で」

「焼肉屋じゃないっつーの」

文句を言いながら，隣の本部席から紙を貰い油性マジックペンを鳴らしながら『関係者席』と書いていく須藤さん。あなたも好い人

です。

「遊佐さん，何するの」

「このまま陸人くんを保護したいけど，下手に大人や警察が出たら逃げられちゃう。こーいう時こそ活用しなきゃ」

「何を活用するのさ」

「あ，まさか！」

山田の左手が，ないはずの眼鏡を触ろうと宙を彷徨い，笑った。困った苦笑いではなく，まるで悪戯っ子のように。これからとっておきの悪戯を仕掛ける子どものように。

「そう。まさかよ。なぁんだ。山田もその気じゃないの」

「思いつく遊佐さんには敵わないな」

「何だよ。おい，山田も遊佐さんも何するつもりなんだよ」

「ちょっとしたアトラクションを付け加えるだけだよ」

そう笑う山田の笑顔，好きだな。大好きだな。

そう。私達はヒーローなんだから。

「結花ちゃん，大丈夫。センセー達に任せなさい」

第１１話　予定は未定？（後書き）

ベタベタですみません…。
次回は　３月９日水曜日　更新予定です。

休載中の『見下ろすループは青』を描き始めました。ストックを只今製作中です。
状況は活動報告で書いておきます。

第12話　フジエンジェル登場！（前書き）

作中の電話部分を『』。録音済み音声を【】で表しました。
何か読みにくくなったかな……。

第12話　フジエンジェル登場！

ドスドスの低音が繰り返し空気を震わせている。
溢れる声に手拍子。ここはライブ会場なのかと，ツッコミを入れたいぐらいだ。

「今日電車で来た人ーぉ」

うおぉお！

「でもって駅から臨時バスに乗ってきた人ぉ」

うおぉお！

「もっとエコして自転車で来た人ぉ」

おぉお！

「さらにエコな歩いてきたヤツー！　」

小さな声に，どよめきがおきる。

「すごいねぇ。家近くなの？　うん。そうか。お家の人にお騒がせしてすみませんって伝えといて下さい」

大本くん演じる悪の組織ムシキズム幹部カマキリ大佐のアドリブに，会場中が笑い声で包まれる。
居酒屋で「ういっす」しか言ってなかった姿からは考えられないテンションだ。

野外ステージの何百人は，ステージ上で繰り広げられる悪役の客いじりに夢中になっている。
悪役のゴムマスクを被った大本くん達が，マイクを片手に時間を稼ぐ。
その舞台下の観客席最前列前で，須藤さんが汗だらけになっているのが想像出来る。
漫才して客いじりして時間を稼いでいる間に，シナリオを組み立てなおしているはずだ。
もっとも，さっきまでいた山田と成瀬さんがアドリブによる変更点を書き出してくれたから出来る事だ。
汗が流れ落ちる。
嫌な汗。
タオルで顔を拭いて，ぴっちりタイツスーツを着込む。
上半身に着込もうと立ち上がって，頭を天井にぶつける。揺れる車内。

「大丈夫ですかぁ？」
「だ，大丈夫だから結花ちゃんから目を放さないでね！　陸人くんもいるのね？」
「それは大丈夫ですぅ。ちゃんとおねぇさまの言う事守ってますぅ。結花ちゃんがいい子で本部席にいるし，陸人くんはお父さんと席に座ってますよぉ。そんな悪い人に見えないんですけどねぇ。普通の若いお父さんですよぉ。こざっぱりした服着てて，誘拐なんですかねぇ。おねぇさま？」

おねぇさま……。
車外の西脇くんの言葉に，思わずスーツを着込む手が止まりかける。
この子，段々壊れてるような気がするけど。まぁいいや。
会場後方に駐車した市役所のバンでこっそり着替える私も，世間

感覚が壊れてきてるし。
狭い車内で一人で苦笑いして，後付の超ミニスカートを装着。うわあ，変態丈じゃん。
頭を抱えて座り込む私の耳に，先日録音した台詞が聞こえる。すでに芝居は始まったらしい。

「山田さんと成瀬さん，着替え終わってスタンバイ入りましたぁ。おねぇさま，あとどれだけですかぁ」
「あ，あと後のファスナーと手袋とマスク……なんだけどっ」

背中のファスナーが上がらない～！
ヒーローの変身って光とともに出来るのが通説だけど，現実はこうなんだな。
精一杯伸ばした手がっ，背筋の筋肉がっ，つりそう！

「お，おねぇさま！　僕がファスナーを上げますっ」
「絶っ対に嫌！　」

西脇くんの心なしか興奮した声に，慌ててドアをロックする。

「遠慮しないでくださいねぇ。あと3分ですぅ」
「りょ，了解！　」

意地でファスナーを上げて，手袋とマスクを装着。なんかロックの掛け方が上手くいかない。取り合えず音がして締まったから大丈夫だろう。
ルームミラーに，品の良い薄紫のフルマスクをした人物が映っている。羽根を模した曲線の中に旧藤里町の市章が燦然と額に刻まれている，立派なローカルヒーロー。
あぁ，自分だとは思いたくないんだけどな。

鏡の中のヒーローが俯いて肩を落としている。

「ファスナー出来ましたかぁ」

「舞台はどう？　」

「ちょうど山田さんと成瀬さんが登場するところですよ。あ，須藤さん。遊佐さん着替え終わりましたぁ。スタンバイＯＫですぅ」

携帯片手に連絡を取る西脇くんの影に隠れながら，細く開けたドアの隙間から外の気配を伺う。

野外ステージの最後部のここは芝生広場になっていて，ベンチがないのにも関わらず人垣があるようだ。

この会場に，一体どれだけの人がいるのだろう。

着込んだヒーロースーツの内側に，変な汗がまた流れる。

【「「そこまでだ！　ムシキズム！　」」】

力強いギターの音がかき鳴らされる。ロックなビートが会場に流れ，観客の大声援が湧き上がる。

【「市長の決済は下りた！　」】

【「今こそ桃花町を守る為に立ち上がる！　」】

人垣の向こうの舞台に飛び出す人影。

二人の腕と上半身が複雑な動きでかみ合う。そして伸びた指先が宙を指す。

【「「町民戦隊！　モモハナジャー！　」」】

あぁ，何て馬鹿なんだろう。

何て，かっこいいんだろう。

会場を埋める子供達は声援を送り，上気した頬を隠さず，真っ直ぐに憧れの眼差しを山田と成瀬さんに送る。
山田は，この中から一人でもいいから故郷に関心を持って欲しいと言っていた。
きっと，その思いは届く。届いてると思うよ。
無給で，労災も出ない，こんな馬鹿馬鹿しい事を一生懸命に取り組む私達の事は無駄にはならない。
そう，きっと無駄にならない。
ヒーローの登場で盛り上がる会場を見て確信する。
思わずフルマスクの下で潤んでしまって，視線を外してしまう。
フルマスクしてるから，私がちょっと涙ぐんだ事なんかバレないのに。
一人で心の中でツッコミをしながら，一組の人影を見つける。

「あれ……ちょっと。このタイミングで帰る人がいる」
「本当ですねぇ。おねぇさまの登場を見ていかないなんて，三千万年後悔しますよぉ」

それは言いすぎ。
また心の中でツッコミながら苦笑い。
フルマスクで視界が黒く霞み，遠くが見えずらい。細く開けたドアの隙間から西脇くんの肩を掴み寄せる。

「ぅえ？　あ，ヤバイですぅ。あの人達，陸人くん達じゃないですかぁ？」
「何ぃ？！　」

ようやっとモモハナジャーが出てきたところで，何故に帰るのよ！
西脇くんが指差す方向に目をこらせば，大人と子どもの影が最高潮に盛り上がる会場の中を立ち上がり歩いていくのが見える。

何で今帰ろうとするかなっ。

「お，おねぇさま！　結花ちゃんが！」

本部席から飛び出す小さな人影。

やばい。陸人くんが帰ってしまうから，思わず自分で連れ帰ろうとしているんだろう。

でも，結花ちゃんも連れて行かれてしまう！

「ちょっと携帯貸して！」

西脇くんの手から携帯を奪い取る。

液晶画面に提示された通話中の文字を確認そ同時に宣言する。

「須藤さん！　陸人くん達帰っちゃう！　確保して！」

「『無茶言わないでくれよっ。こっちが誘拐犯になったちゃうだろ！』」

冷静な指摘に，フルマスクの中で唇をかむ。

じゃあ，このまま見過ごすのか？

ここまで出来る訳ない。

腹の中で何かが固まる。湧き上がる。

それは怒りにも似た何か。

「脚本変えます」

「『遊佐さん！』」

「ごめん須藤さん。私の登場早めます。アドリブで行きますから」

「『駄目だよっ。この後にレッドとホワイトの台詞があって，フジエンジェルのコールを入れてやらないと話が無茶苦茶になる！遊佐さん！』」

泣きそうな須藤さんの叫びを，通話ボタンを押してぶち切る。
ごめんね。

「西脇くん，中田さんとこ行ってマイク確保」
「は……はい！　おねぇさま！　」

突っ走っていく西脇くんの背中を，祈るように見送る。
上手くいけ。間に合え。頑張れ私。ここで踏ん張らなきゃ，絶対に後悔する！
やりにくい手袋で，中田さんのボタンを押す。
いつもヘッドホンしてるし，この会場の大音響の中で気づくかな。
そんな不安を2コールで吹き消した。

「『遊佐さん，無茶しすぎ』」
「ごめんなさい。でも脚本通りのタイミングじゃ間に合わないからっ」
「『今，西脇くんにマイク渡したから……あ！　女の子，手ぇ捕まえられた！　』」

携帯の向こうの言葉に，思わずドアを開け放つ。
役場の車から突然現われた全身タイツ&フルマスクに周りにいた人垣がたじろぎ，どよめきが起こるのも構わずに車のフロント部分に飛び乗る。
フルマスクの向こうで，会場を去ろうと歩く人影が三つになった。
結花ちゃん！

「今から出るから音出して！　」

ステージで繰り広げられる，悪役との格闘場面。

大本くん演じるカマキリ大佐が大見得を切り笑い出す。

【「ふあっはっはっ。今日の我らムシキズムは一味も二味も違うのだぁ！」】

「『遊佐さん，いくよ！　』」

携帯から中田さんの叫び声が伝わると同時に，その台詞の後に続く音声が切られる。

突然の事に動きが止まる山田達。何事かと，期待が混ざった観衆のざわめき。

フロントガラスを駆け上り，市役所のバンの上に上る私。

人垣の向こうから駆けてくる西脇くんが，マイクを宙に投げる。

時間が鈍化した空間を，四つ打ちの低音が刻みこみ始める。

「そこまでよ！！　」

投げ渡されたマイクを掴み取り，「きゅいいぃいん」な共鳴音と同時に叫ぶ。

車の上から見下ろす観客が一斉に振り返る。

そう。体育館一杯ぐらいの人の視線を一身に浴びる。

背筋に稲妻が走った。

「これ以上桃花町の人々の笑顔を失わせる事はさせないわ！　」

とっさに機転をきかせた須藤さんが，本部席からマイクを掴んで舞台へ走りこむ。

全速力で走る熊のような背中を，心強く見下ろしながら叫ぶ。

突然変わった会場の雰囲気に，陸人くんが立ち止る。結花ちゃんが陸人くんの手を掴んでいる。

そのまま待っていて。そこで待っていてね。

「……アドリブ？　そんな無茶な…な，何ヤツだっ」

舞台でマイクを受け取った大本くんが，ぼやきながらカマキリ大佐としての台詞を響かせる。

大本くんの瞬間的アドリブ能力を，信頼するよ。だから，私に結花ちゃん達を助けさせて。

「子どもの笑顔を守る為，藤里町の笑顔を守る為」

マイク片手にポーズをつけようとして，左手で携帯を持ったままな事に気づく。

車の下に来た西脇くんに携帯を投げ落としながら，腕で大きく円を描く。

「風に揺れる一房の藤から生まれた希望！」

大きく羽ばたくように両手を交差して片手で空を指差す。

腰に当てる手でマイクを持って，モデル立ちをして宣言する。

「私の名はフジエンジェル！」

もう，もう戻れないよ私。

第１２話　フジエンジェル登場！（後書き）

次回　１６日　水曜日に更新予定です。

『見下ろすループは青』のストック，只今三話分目を描いてます。今週中には４話分目に取り掛かれそう。また活動報告で書いておきます。

第１３話　勇気をあげる！

何百という顔，顔，顔。突き刺さる視線が痛い。でも，これを快感に変えろ，私。

腕が震える。膝が笑ってる。

２４名の子供達を前にして緊張で失敗だらけで終わった初めての教育実習に比べれば，何てことない……はず！

ここで魅せろっ。保育士の底力！

「これ以上の狼藉は許さないわよ！　」

「な，何を小癪な！　フジエンジェルだと？！　聞いてないぞ！」

大本くん，ナイス切り替えし。

会場に大音響で流れるフジエンジェルのテーマ曲にあと押しされるように，下で待機する西脇くんに『下がれ』と合図を送る。

「その車，役場の車なんですよぉ！　正しい使い方して下さいぃ」

西脇くんの訴えを無視して，僅かな車体の幅で踏み切り側転で体を反転させながら車から飛び降りる。

なんとか両足で着地するとローヒールが芝生にめり込んだ。大丈夫，足の震えは止まった。

「ヒーローの正しい使い方でしょ」

西脇くんの肩を軽く叩いて，会場の花道向かって走り出す。

歓声が沸きあがる。どよめきと共に，人垣が割れて道を作っていく。

その中を走り，気づく。
あぁ，みんな，何ていい笑顔してるんだろう。
大人は子どもに返ったように無邪気に。子どもは憧れに頬を赤らめて。

「でも，私は生まれたばかり。力が足りないの！　モモハナジャーを助ける為に，みんなパワーをちょうだい！　みんなの元気な声が聞きたいよー！　」

人垣の中を会場中央まで走りぬけ，大きく頭上で手拍子を取る。うねるように湧き上がる拍手の波。会場が一つのリズムで律せられる心地よさ。
そうしながら，フルマスク越しに会場中央の道に立ち尽くす陸人くん達を確認する。
呆気にとられて立ち尽くす3人を。そのままソコにいて。
手拍子を続けながら，少しずつ会場中央の花道へ近づいていく。

「今日，一番元気なお友達ー！　」

マスク越しの声に，大歓声が上がる。
素直な子ども達には悪いけど，狙いは一つしかないの。ごめんね。

「もっともぉーっと元気なお友達ー！　」
「はぁーい」

遠慮がちな手が上がる。お父さんの手を離し，陸人くんの手が会場の雰囲気に引っぱられるようにおずおずと上がる。
待ってました！
精一杯に声を上げ，千切れんばかりに手をあげる子ども達の前を駆けて，まっしぐら中央の花道で立っている陸人くんの所へ駆け寄

る。

「元気なお友達見つけました！　お名前を教えて下さいっ」

「こ，こうさかりくとでしゅっ」

緊張で幼児言葉になった陸人くんに手を伸ばす。

この手を取って。私の手を，自分の意思で握って！

祈るように，膝を折る。シンデレラの前で求婚を願う王子のように，手を差し出す。

「陸人くん，私に力を貸して。モモハナジャーを助ける力を私に貸して」

「……うん！！　」

小さな，丸みが残る幼い手が，そっと私の手に乗せられた。手袋こしに感じる，柔らかな温かみ。

頂きました！

「じゃあ，一緒にステージに来て！　結花ちゃんも一緒に！　」

「な，何で私の名前知ってるの？！　」

思わず結花ちゃんを名前で呼んでしまった。

そして的確にツッコむ結花ちゃん。

驚き固まる結花ちゃんの手を，マイクを持つ手で捕まえる。

身柄は確保。

「あ，あんた警察なのか……？　」

明らかに動揺して固まった父親の零した言葉に，首を振るとマスクが揺れる。

四十代前半だろう風貌にしては，落ち窪んだ暗い目が，凄みある迫力で私を睨んだ。

「いいえ。ただの公務員です」

この離婚の原因なんて知らない。私は部外者だ。でも，親だからと言って子どもの幸せを決めてはいけないというのは判る。

お母さんは教えてくれた。父は実践してくれた。

幸せは，自分で掴み感じるものだ。親であっても，その手伝いしか出来ない。

親は手伝う事は出来るだろう。支える事は，見守る事は出来る。でも，干渉してはいけないのだ。

子どもの，その子個人の人生を犯すことなど，何人たりとも出来ないのだから。

だから，貴方は大きな間違いをした。

「貴方の人生と，子供達の人生は，同じではないんです」

「何を言ってる」

「この子達の選択を奪ってはいけません。それは罪です」

「あんた一体……」

自分で選択した人生なら，どんなに苦痛でも耐えられる。

与えられた苦痛でなく，選び取った苦痛なら，どんな人生だって踏ん張れる。

高校から実家を飛び出した私も，自分で決断した事だから頑張れた。

逃げ場所がない環境でも，受け入れて踏ん張れた。

選択して決断する権利。その最低限な権利すら，親だからという理由をつけて奪うなんて許せない。

「見てあげて下さい」

でも，この罪に対し制裁を下すのは私ではない。母親でも，結花ちゃんと陸人くんでもない。

社会の礎となる法によって裁かれるべきだ。だから，私は時間とチャンスをあげる。

家族で話し合う時間とチャンスを。

「陸人くんと結花ちゃんのステージ，見てあげて下さい」

もうすぐ，母親が会場にやってくるだろう。

警察と一緒に。

そしてその時に，法によって罪を償えばいい。謝罪をすればいい。話し合えばいい。

家族の時間を，もてばいい。

「フジエンジェル！　」

刻まれる低音と山田の声に押されるように，立ち上がる。

会場の歓声が背中を押す。

花道前の「関係者席」に座る尚吾くん達が，ぽかんと口を開けて見送る。

やばいな。今の会話聞こえたのかな。

またスーツの下で嫌な汗が流れるのを感じる。

「フジエンジェル！　」

「ありがとうフジエンジェル！　」

ステージから白地に赤のラインがはいったモモハナジャー　レッドとホワイトが駆け下りて来てくれた。

逞しい手は，そのまま結花ちゃんを促しステージへ押し上げる。
陸人くんを引っぱり上げ，山田演じるレッドが私の手を掴む。

「お疲れ様」
「ごめん」

マスク越しに囁いた小声に，頷くレッドのマスク。
その向こうに山田を感じる。手袋の奥にある，大きな冷たい手が恋しい。

「こ，これ以上の勝手は許さんぞー！　」

地団駄を踏むアブラムッシーとカマキリ大佐の言葉，ごもっとも。
すみませんと，思わず頭を下げてしまう。

「今はフジエンジェルだからリアルに謝ったら駄目だよ」

あ，そうでした。
フルマスクしてる私は今，フジエンジェルだった。
マイクを通さずに耳元で注釈してくれた成瀬さん，あなたもやっぱり好い人です。
会場から漏れる失笑に，軽く「エヘッ」とポーズする。
普段の私ならしないポーズだって，戦隊ヒーローなら許される。

「心強い勇者が味方になった今，俺達に恐れるものは何もない！　」
「今こそあの技を！　」
「さぁフジエンジェルも！　」
「えぇ！　」
「小さな勇者達も一緒に！　会場のみんなも一緒に！　」

舞台下で，須藤さんが『シーン9から！　』と書きなぐったダンボール紙を激しく揺らしている。
客席の右手にある音響ブースで中田さんが手を上げた。

「ぼくもやる！　」
「よし。じゃあ大きく手を広げて。そう，空一杯にみんなの笑顔を集めるぞ！　」

山田が素早く右手を振り上げ，ポーズを決める。
振り下ろされる右手と同時に，クライマックスの音楽がスピーカーから飛び出す。
低いベース音。盛り上がるメロディー。会場からの大声援。
それら全てを装飾にして，私達は何度も練習した動きをこなしていく。
互いの腕の動き，足の動き，上半身の傾けが揃わなければ，滑稽としか言えないポーズを素早く連続して決めていく。
ムシキズムの皆さんも，タイミングよく慌てふためく寸劇を繰り広げる。

「最終合体技！　」
「合併戦隊・フジモモジャースペシャル！　」
「スーパー・スマイル・フラーーーーシュ！！　」

大きく腕を回す。
緊張と興奮で頬を赤らめた陸人くんも，恥ずかしさで顔を染めた結花ちゃんも遠慮がちに，腕を回す。
私達がその腕の先をカマキリ大佐達に向けたと同時に，爆発音。
舞台下と袖に用意した照明ライトがフラッシュを繰り返す。少し遅れて，奮発して買ったというパーティー用特大クラッカーが上手と

下手から発射された。
会場に舞い上がる紙テープ。晴れ渡った空に極彩色のテープが舞い，大歓声が辺りを満たしていった。

日差しは，いつの間にか厳しいものになっている。
今年の夏も暑そうだ。
土ぼこりをあげるグランドに水を撒く。じょうろから零れ落ちる水滴が，キラキラ光って泥になった。
児童館は今日も子どもの声で溢れている。
天気がいいので，男女対抗でドッチボールをするらしい。
ラインをじょうろで書きながら勧誘を受ける私。いつもの慌しくも平和な日常だ。

「センセーは俺達のチームに入るんだろ?！」
「先生，女の子ですよ」
「２０過ぎたらおばさんだろ。もう男でもいいじゃん」
「……決めた。あんた達速攻で倒す！」

乾いたグランドに男の子達の悲鳴が響く。
まだ２０代前半の乙女をおばさん呼ばわりした事，後悔させてやる。
意気揚々と倉庫からボールを取り出すと，ゴムの表面がペコンとへこんだ。
どこか穴でも開いたのかな。これ以上，備品の購入申請できるのかな。
冷や汗をかきながら，空気入れのポンプを取り出す。
グランドの子ども達は，倉庫前の私の様子を確認すると互いを挑

発する口げんかを始めた。
元気な事だ。

「センセー，直りそう？　」
「うーん。空気が抜けただけだと思うんだけどなぁ」
「早く空気入れて。男の子達を速攻で倒してよ。もうセンセーまだ若いのにおばさん呼ばわりするなんて許せないよねっ」

軽い足音とともに結花ちゃんがやって来た。
針を射してポンプを押し出した私の足元で，そっとボールを支えてくれる。
そのほっそりとした背中を見下ろし，微笑む。
あれから，少しだけ話を聞けた。
家族で話し合えた事。父親が養育費を払ってくるようになった事。
そして小池先生からも連絡があった。
陸人くんの生活態度が明るくなってきた事。
最近の結花ちゃんも，よく笑う。
だから，安心している。
私はただの児童館の先生で，これ以上深入りは出来ないけれど確信している。
周りの大人達も含め，きっと好転している。未来を良くしようと，変化している。

「あ，ボール大きくなってきた！　」
「もう少し入れようか」
「でもカチカチは嫌だよ。当ると痛いもん」
「そうだね」

リズムカルにポンプを動かし，空気を送り出す。ボールは少しずつ膨らんでいく。

「センセー，ありがとうね」
「いえいえ。空気はこのぐらいでいいかな」
「うん。あのね」

針を引き抜き，ボールの固さを確かめるように両手で挟み込んだ結花ちゃんが立ち上がった。
ポンプを片付ける私の前に，くるりと回りこんで頭を下げた。
目の前に，ウサギの髪留めが揺れる。
「フジモモジャーで助けてくれて，ありがとう」

第１３話　勇気をあげる！（後書き）

次回　２３日　水曜日に更新予定です。

東北，北関東，長野北部で地震に遭われた方々に祈ります。傷ついた心が，休まりますよう。何気ない日常が，少しでも早く取り戻せますよう。この惨状から少しでも好転していきますよう，祈っています。

第１４話　恋するヒーロー！

埃っぽい倉庫に，ありえない言葉が静かに空気を揺らした。
手が揺れて，ポンプを落とす。床に散らかった石灰が舞い上がった。
聞こえた台詞を信じられなくて，恐る恐る振り返る。
そんな私に，結花ちゃんは微笑んだ。

「舞台が終わってお礼が言いたかったけど，あの後お母さんと警察来ちゃうし。ドタバタで帰らなくちゃいけなくてお礼が言えなかったの。陸人が，「ありがとう」って言いたかったらしくて」
「う，うん」
「だからフジエンジェルに伝えておくって言ったの」
「……そっか」

ばれてますね。
私がフジエンジェルって，ばれているんですね。
嫌な汗が背筋を流れ落ちる。

「大丈夫。秘密にするよ。だから，センセー，フジエンジェルに伝えてね」
「……ありがとう」

私がフジエンジェルをした事を知ったうえで，「伝えてね」と。
そう言ってくれる事が嬉しいけど，申し訳ない。
でも，ここは内緒にしてもらわないと。ヒーローは誰か判らないのがいいのです。
顔も判らない誰かが，体を張ってみんなの為に戦う。だからヒーローなんだから。

「ありがとう」
「うん。ありがとう」

そっと頭を撫でると，くすぐったそうに笑った結花ちゃんが倉庫を飛び出していく。
フジエンジェル，やってよかったな。
しみじみ思って，立ち上がる。
エプロンの裾に付いた石灰粉を叩きながら倉庫を出ると，コートで口げんかしてい子ども達がおとなしい。

「センセっ。あれあれっ」
「いつぞやの不審者っ」
「センセーの彼氏っ」

不謹慎な囁きと指差しに振り返れば，緑のフェンスに持たれかかり手を振る男が一人。
ダサい眼鏡の奥の澄んだ眼差し，見慣れた寝癖。

「市役所の人を指差して不審者扱いしないの。先にドッチしてて」

冷やかしの歓声を無視して，フェンスに駆け寄ると山田が笑った。

「俺，不審者で彼氏なの？」
「何でいつも職員室に来ないのかなぁ。しかもまだ仕事中」
「仕事してる遊佐さん，見たいからさ」
「……っ。柴田先生に見つかりたくないの？　今日も職員室にいるけど」

なんでそう，無自覚なのかなぁ。

罪のなさそうな笑顔に，私は何も言えなくなってしまう。
動揺を悟られないように，エプロンのポケットに手を突っ込むと山田が眼鏡フレームをいじる。

「おばさんだけは苦手なんだよ」
「……おばさんって，柴田先生？　」
「そう。昔からあの人には勝てないんだよなぁ」
「親戚？　」
「そういう事」

親戚関係。という事は従兄弟の成瀬さんとも親戚で……。地元だと，職場が重なることもあるんだなぁ。
まさか，今時のご時勢で縁故就職じゃないんだろうけど。

「おばさんが出てこないウチに，これ渡しておくよ」
「今度の打ち合わせ？　」
「秋の商工祭りで正式に依頼が出たんだ。是非フジモモジャーをしてくれって」
「秋かぁ。先のようでいて，時間あまりないね」
「うん。いつものウサギ屋で。大丈夫。須藤さん怒ってないから」

最後の言葉に，肩を竦める。
初登場で勝手をやってしまった私は，あの舞台の後に頭を下げまくった。
事情があったとはいえ，須藤さんが頑張って作った脚本をブチ壊してしまったのだから。
受け取った打ち合わせの紙の端をいじりながら俯く。

「みんな怒ってないからさ。あの時はしょうがなかったよ。それに，好評だったじゃないか。須藤も判って『次回は今回以上面白い

の書く！』って意気込んでるよ」
「そっか……うん」
「だから，来るね？」
「うん」

だって，フジエンジェルしなきゃ山田と会えない。
ソッポ向いて頷く私の耳元で，突然山田が囁いた。

「あと，何か言い忘れてない？」
「……？」
「控え室で何か言いたそうだったじゃん」
「……！！」

突然の言葉に，勢い良く振り返る。
黒縁眼鏡の奥の瞳が，微笑んでいた。悪戯っ子の微笑みに，唸る。
私の気持ち，判ってるの？　山田が好きって，ばれてるの？
反則じゃないか。そんな笑顔したら，私の体温は急上昇しちゃう！

「遊佐さん。顔真っ赤だよ」
「……馬鹿っ」
「馬鹿でいいよ。俺，遊佐さんなら何言われても良いよ」
「……やっぱり成瀬さんと従兄弟だ。意地悪」
「浩介の名前，ここで出すかな」
「……ごめん」
「ごめんじゃなくて。何て言うの？」

もう！　もう！
山田を鈍感だと思ってたのに！　天然だと思っていたのに！
私の気持ちに，いつから気づいてたんだろう。
言いたい事，聞きたい事はたくさんあるけど，チャンスは今しか

ないのか。
ドッチを始めた子ども達の歓声を耳に流して，そっと囁く。
恥ずかしくて，手にした紙で口元を隠して。
「山田が好きっ」
「うん。俺も遊佐さん大好き」
言葉と同時に，ふわりと紙の感触が唇に触れた。
冷たくて大きな手が，紙を握る私の指先を包んだ。
「遊佐さんが好き」
それは，子ども達の歓声にかき消される程の囁き。
でも，その囁きは無敵の言葉。
溢れる想いを全て受けとめて。
紙越しのキスを受けとめて。
「じゃあ，またウサギ屋でね」
「……うん」
「あ，そうそう。西脇くんがね，新しいコスチュームを作る気でいるよ」
「……それは止めたほうがいいと思う」
「でも，ピンヒールは是非挑戦して欲しいな」
「……却下」
「男のロマンなんだってば」
「嫌」
「俺の頼みでも？　」
眼鏡の奥の瞳が無邪気に微笑む。寝癖の髪を柔らかく揺らす南風。
眩しい西日の中にいる愛しい人に，微笑み返す。

「馬鹿っ」

愛しい愛しい，私のヒーロー。

第１４話　恋するヒーロー！（後書き）

これで完結です。

何とか描けました。ここまで読んでくださり，ありがとうございます。

え，えっと。休載中の『見下ろすループは青』ですが，ストックは４話でストップ中です。すみません。

子どもが順にインフルエンザに伝染ってまして，看病の為とても時間がとれません。

あと，先日の北関東　東北の大震災で。

『なろう』でも有志が『ｓｍｉｌｅ　ｊａｐａｎ』企画を立ち上げました。被災された方へ無料小説サイトだから出来る小説による応援です。

これに参加しようと思っています。

待ってくださる方には申し訳ありませんが，もうしばらく時間を下さい。今は新しいプロットが頭で動き出した状態です。完結までの起承転結がはっきりしたところで，再び作品を描いていく予定です。『見下ろす』と『企画小説』を二作同時に描くという，恐ろしい事に挑戦です。

でも，自分に出来る事は描くしかないので。少しでも楽しい時間を提供出来る可能性があるなら，やってみたいんです。

是非，この無謀な挑戦をさせて下さい。

わがままばかりで申し訳ありませんが，甘えてばかりですが。

『見下ろす』をもう少しお待ち下さい。

おことわり，とか。

ここまで読んでくださり，本当にありがとうございます。
『恋せよヒーロー！』完結させる事が出来ました。何とか，何とか……。

本当に勢いで書き出した話だったので，無茶苦茶に暴走しています。勢いを楽しんでくだされば，幸いです…はい。

あと強調すべき点が幾つか。
幾つかご当地ヒーローを参考にしています。ただ，あくまでフィクションですから！　ここ強調です。
藤里町と桃花町のモデルもあります。でもフィクションですから！　ここも強調です。
どちらも，私が以前縁があった場所を活用しました。描いてて懐かしかったです。
あと，公務員の仕事ぶりはこんなんじゃない事も強調しときます。こんな公務員，いたら怖いですから（笑）。
保育士の仕事ぶりも，あまり信じないで下さい。遊佐ちゃんの無茶苦茶ぶりは，あくまでお話だから描いただけです。良い子は信じちゃ駄目ですよ（笑）。

ともあれ。完結は一安心。
読んで下さりありがとうございました（ぺこり）。

後書きで書きましたが。
『見下ろすループは青』を休んだままですが，もう少し時間を下さいと改めましてお願いいたします。
有志での企画『ｓｍｉｌｅ　ｊａｐａｎ』に参加予定です。少し

描き溜めたら参加表明する予定です。
本当，どれだけ出来るかわかりませんが。
私自身，今回の震災でショックが大きすぎて「描けない」「読めない」状態でしたが。
でも，救援に行っていた弟が帰ってきた事もあり，少しホッとした現状で。
弟曰く「すごいことになっとる……」と。抑えられた言葉に，惨状の酷さを感じました。
私に出来る事は描くしかないですが。出来れば連載という形で長く参加したいんです。
この震災の復興は長くかかるでしょうから，だから長く支援する形で描いて行きたい。そうなると，しっかりした骨組みを考えて話を考える必要があり……。どうしても『見下ろす』にかけていた時間や気力を幾分か回さねば出来ません。
待っていて下さる方には申し訳ありませんが，どうかご理解頂ければ幸いです。
もちろん，キチンと連載を再開します。ここ強調です！　自分自身，描いていきたい話ですから。っつーか，エリドゥの街を描くために小説を描き出したんです！　『千夜を越えて』で描きたかったのはエリドゥの街だったんですー！！（爆）　いつになったら描けるんだろう（泣）。だから絶対描きますよ。描いてやるーーー！！
すみません。
もうちょっと，お待ちください……。再開のめど，予告は必ずしますから。
なんだか，全然違う事も書きましたが。
キチンと次回への動きも含めてここで報告させていただきました。
最後になりましたが，ここまで読んでくださりありがとうございました。

次回へ向けて，とりあえず私は頑張っていきます。
では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5816p/

恋せよヒーロー！

2011年3月23日13時10分発行